異世界生活はじめました

AG556

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界生活はじめました

【Nコード】

N3878P

【作者名】

AG556

【あらすじ】

『神』の事務手続きのミスというとんでもない理由から死んでしまった有坂アリサカ厳正タケマサ。しかしその口止め料として異世界でのセカンドライフをプレゼントされるのだが、そこはとんでもない世界だった。初めて皆様の目に触れさせていただきます。

文章や設定もザルで拙く、結構自己満足ですがどうぞよろしくお願います。

『ノクターンノベル』にて番外編の連載も始めました。

タイトルは『異世界生活はじめました - 有坂厳正の性生活 - 』です。

18禁ですので、18歳以上でお時間がある方はご覧下さい。
あと、ご覧にならなくても本編の方に差し支えはありません・・・
・おそろくは。

0・装備説明（前書き）

作中に登場する装備についての説明です。

なお、作者の知識と主観に基づく情報なので間違いはご容赦を。

その際はご指摘頂けるとありがたいです。

なお、念のために申し上げますが、どの銃が優れているかの論争、銃や作者への誹謗や中傷、『何であの銃出さないの？何で！？』的な悪質と判断したコメントは、申し訳ありませんが削除させていただきます。

あくまで、物語を補完する『ツール』としてご覧ください。

あと、専門用語が出てくる場合もございますが、わからない場合は Wikiなどで調べて頂ければ分かりますので、御手数ですがよろしく願います。

0 ・装備説明

・SG550 弾丸：5.56mm×45弾 装弾数：30

スイスのSIG社（現スイスアームズ）がスイス軍向けに開発したアサルトライフル。

世界最高峰のアサルトライフルの一つに数えられ、AK並みのタフさを誇る上にスコープを着ければPSG1並のスナイパーライフルに早変わりする程の命中精度を持ち、引鉄のキレや工業製品としての質も非常に優秀なチート銃。

かなり撃ち易いらしく撃ち上げた缶が斜面に落ちて転がり落ちてくるのをまた撃ちあげるといふ芸当を繰り返せるほどらしい。

その性能を示すかのようにアメリカのSEALSやフランスのIGNなど世界の名だたる特殊部隊で使用されている。

ただ値段がバカ高く、米軍採用のM16の5倍ぐらいの価格がするとかしないとか・・・

ちなみに主人公のは、ハンドガード部分にR・A・Sが装備されておりライトやM320が、マウントベースのレイルにはドットサイトが装備されている。

なんとという邪道な装備。

・P226 弾丸：9mm×19弾 装弾数：15

スイスのSIG社（現スイスアームズ）が開発したオートマチック式ピストルで世界最高峰のコンバットオートに数えられる一丁。

1980年代に行われたアメリカ軍の次期制式拳銃のトライアルでは、現採用のM92Fと共に最終選考まで残り惜しくも敗れたが、決して性能が劣っていた訳では無い（値段が高かったから敗れたとも言われている）。

特殊部隊関係者からの評価は非常に高く、特殊隊員の中には自費で購入して作戦に使用する者もいるほどらしい。

主人公のは、Mk23の様に延長されたバレルにはサイレンサー装備用の溝が切っており、アンダーレイルにはフラッシュライต์が装備してある。

・M320 弾丸：40mm×46弾 装弾数：1

ドイツのH&K社が開発したダブルアクション式のグレネードランチャーで、レイルを介して銃のアンダーバレルに装着する事ができ、グリップが付いているので単独としても使用可能。

ちなみにM203やGL5040などのシングルアクションを主人公が嫌い、ダブルアクションのM320にした、という設定。

初期稿ではXM320と表記していましたが現在では“X”は取れた模様。

suehirgarさんご指摘ありがとうございます。

・戦闘防弾チヨツキ2型

陸上自衛隊で採用されているボディアーマー。

PALSと似た装備取り付け用のウェビングが縫い付けられており様々なポーチの取り付けが可能。

ちなみに中に入っている防弾のセラミックプレートは『レベル？』相当という設定。

おかげで基本重量が12kgに・・・その他装備を括りつけたら・・・
・・・主人公涙目。

・01式軽対戦車誘導弾

陸上自衛隊で採用されている対戦車火器で通称『01（マルヒト）』

赤外線誘導を採用しており、『撃ちっ放し（Fire and Forget）』が可能。

使い捨ての発射筒と再利用可能な発射機からなり、頑張って発射筒を交換すれば1分間で4発の発射が可能。

ちなみに発射モードはダイブモード（トップアタック）と低伸弾道モード（ダイレクトヒット）に二種類で、バック・ブラスト（後方への爆風）もトーチカなどの閉鎖空間で使用が可能なほどに抑えら

れている・・・らしい。

・M82A1 弾丸：12.7mm×99弾 装弾数：10

アメリカのバレット・ファイアーアームズが開発した対物ライフル。対戦車用として使用されていた弾丸を使用するため、対人使用がハーグ陸戦条約に抵触する恐れがある。

イラク戦争では米軍が使用し、その際イラク兵を狙撃したら真つ二つになったとか・・・

用法容量は正しく使いましょう。

・AA-12 弾丸：12ゲージ 装弾数：8/20/32

アメリカのMPS社が販売するオートマチック式ショットガン。

マガズイン式給弾方法を採用しており、装弾数や給弾の面で有利である。

またフルオート射撃が可能な上に、反動も片手で使用可能なほど押さえられている・・・らしい。

作中ではマウントベースにドットサイトが装備してある。

原型の開発は1972年と結構古く、その後188箇所も変更されてから再発売らしい。

ちなみに作中で『バラ弾』という表現がありますが、『00バツクシヨトを砕けて言ったモノ』と受け取って頂いて結構です。

作中では20発ドラムマガズインを主に使用。

え？何で32連使わないかって？

「だって32じゃキリが悪いじゃん」BY主人公

・P90 弾丸：5.7mm x 28弾 装弾数：50

ベルギーのFN社が開発したPDW（個人防衛火器）。

PDWのパイオニア的存在でペルーの96年の日本大使館占拠事件で使用されて世界中、（のガンマニア）に衝撃を与えたのは有名である。

拳銃弾とライフル弾の両方の特性を持つという特殊な弾丸を使用し、貫通力やストッピングパワーに優れている。

近未来的な形状ではあるが、人間工学に基づいた設計で撃ちやすいらしい。

フィーナのメインアームズ。

・USSR VSS 弾丸：9mm x 39弾 装弾数：10/20

旧ソ連で開発された狙撃銃。

サイレンサーが銃身と一体になっており、9mm×39弾という特殊な弾丸を亜音速で発射するため消音効果が高く、ボディーマーキング用の兵士を400m先から打ち抜くことも可能らしい。

04年の北オセチアの学校占拠事件でFSB（ロシア連邦保安局）の特殊部隊『アルファ』が使用しているのが確認されている。

・FN Five-seven 弾丸：5.7mm×28弾 装弾数：20/30

ベルギーのFN社が開発したオートマチック式ピストル。

P90と同じ口径の弾丸を使用するため、P90のサイドアームズという位置づけ。

因みにフィーナが使用しているのはUSGモデル。

・FFV M3 “カールグスタフ” 口径：84mm 装弾数：1

スウェーデンで開発された無反動砲で対戦車、対装甲車、対トーチカと使用できる幅も広い。

作中では『自衛隊でも使用されている』と記されているが、実際に自衛隊で使用されているのは旧モデルのM2で新モデルであるこのM3は使用されておらず、厳密に言えばこの表現は正しくない……かもしれない。

材質をM2のときの合金からアルミニウムとFRP（繊維強化プラスチック）に変更し軽量化が図られており、M2に比べ6kg以上軽く大きなアドバンテージとなっている。

01式軽対戦車誘導弾と比べると旧式に位置する対戦車兵器であるが、大きな発射筒を持ち歩かなければならない01式に比べてかさ張らず、汎用性も高いため使用されている。

・USSR PKM 改修型 弾丸：7.62mm x 51弾（本来は7.62mm x 54R弾） 装弾数：ベルト給弾

旧ソ連で開発された汎用機関銃。

AKシリーズの生みの親であるカラシニコフ氏が設計した旧東側ではスタンダードな機関銃で現在もロシアなどの軍・法的執行機関の特殊部隊（アルファ、オモン、クレチエツトなど）などで採用されている。

さて、銃に対する知識が有る方は「使用弾丸が違くない？」と突っ込まれたことでしょうか。

このPKM改修型は本来使用する弾丸の7.62mm x 54R弾ではなく7.62mm x 51弾を使用するように改良されています。

これには一応理由があり、旧式のリムド弾薬である7.62mm x 54R弾を使用したことによりPK（PKMの原型）はその構造を複雑にせざるを得ず、信頼性に制限がかけられているというレポートがかつてアメリカで発表されています。

またその文中で『もしPKがリムレス弾薬を使用すればもつと優れた機関銃になったであろう』とも述べられており、旧式であるリムド弾薬を使用しているにも関わらずPKやPKMが優秀な事を考えると未恐ろしい銃だと思えます。

そこで威力や射程を若干犠牲にしても、その構造を単純化し信頼性を高めるために弾薬を変更したという設定です。

ちなみにこのPKM、西側でスタンダードな汎用機関銃であるFN MAGと比べると価格が約三分の一とコストも安い上、重量も約3kgも軽く、主に強襲・奇襲などの機動力が求められる際の戦闘時に使用されている、という設定。

・IMI ガリル AR 弾丸：5.56mm×45 装弾数：30

イスラエルのIMI社が開発されたアサルトライフル。

名銃として名高いAKシリーズの構造を踏襲し、確実に作動するロングストロークガスピストン方式を採用している為非常に堅牢な造りをしている。

この事からAKシリーズのコピーとも言えるが、照星と照門間の距離をAKより長く取り、弾丸を5.56mm×45弾を使用する事などの改良により7.62mm×39弾を使用するAK47やAKMと比べ反動が少なく連射時の集弾性も勝っている。

その他、外観にも手が加えられレシーバー右側面のセレクターレバーの他にもグリップ左側面上に小型のセレクターレバーが取り付けられているなどの改良が見られる。

因みに厳正達の一派が使用するものには、ハンドガード部分やマウント部分にレイルが標準装備され、マガズインも従来の35発マガズインからNATO標準のSTANAGマガズインを使用出来るように改造されている。

同じく採用されているMINIMIとのマガズインの共有の為に改造したという無茶設定。

因みにイタリアのベルナンデリ社がガリルをSTANAGマガズインが使用できるように改造したVB-STDというのも有るが、詳しい情報が手に入らなかつた為ここではこの名称は使用しません。

あと「レイル付いたガリルなら、ガリル・エースの方が良いんじゃないねえ？」と思われた方もいるかと思えます。

これは筆者がガリルとM4っぽい伸縮式ストックの組み合わせが何か嫌いという、いわば筆者の嗜好の都合でガリル・エースの登場は見送られました。

やっぱガリルは折り畳みストックでしょ（笑）。

0・装備説明（後書き）

文中で『らしい』という表現が多いのは、作者があくまで情報としてしか知らないからです。

偉そうな事いつて銃を撃った事ありません。

厨二病なで射撃童貞な作者ですがどうかご容赦を。

1・異世界にこんにちは(前書き)

初投稿です。

拙い部分も多いですがどうぞよろしくお願ひします。

12/11 旧第一話と旧第二話を統合。

サイドアームズをSP2022からP226に変更。

1・異世界にこんにちは

「んあ？」

目を醒ますとそこは森林のなかであった。

俺こと有坂巖正はアリサカ タケマサ 冴えきらない頭で必死にさっきの非現実的な展開を思い出していた。

『神』の事務手続きのミスによって死亡 口止めの代わりに異世界で好き勝手に生きて下さい あと稼いだ『通貨』や取得した『ポイント』を使う事で装備を買ったり、能力を開花する事ができます ですので好き勝手にやっちゃって下さい。

・・・いま思い出してもムカつくわ。

まあ、ムカついても仕方ないので装備の確認をします。

SG550は・・・よし、ハンドガードにはR・A・Sがしっかり装着されてるしM320やドットサイトも付いてる。

サイドアームズのP226もちゃんとあるし、装備の要のピストルベルトや、長期の行軍に欠かせないサスペンダー、そして戦闘防弾チョッキ2型もしっかりある。

弾薬や食糧も十分そうだしそろそろ探索でも・・・

「おい、貴様」

ん、このテンプレ的な展開は・・・

「命が惜しければ身ぐるみ置いてけ」

あー、やっぱり盗賊の皆さんでしたか。

.....

結論から言おう。

決着はあっという間についた。

まさかSG550のフルオート射撃を1マガジン分(30発)を横薙ぎに撃つだけで済むとは思わなかった。

まあ、人数も五人だし装備の性能差が五世紀分以上あるファンタジー世界の盗賊ならこんなものでしょ。

そしてかく言う俺の気分はと言うと・・・最悪である。

神から耐性を付けて貰っているものやはり初めての殺人はいい気分ではない。

今にも胃酸が逆流しそうだ。

まあ、こんな世界に来た以上慣れるしか無いのだろうが・・・

そんな事を考えながら俺は盗賊の所持品を漁っていた。

恐らくは地図位は持っているだろうと思い、漁ったのだが……
何にも出てこない。

取りあえずこの世界の通貨が手に入った分幾らかマシだが……
ん？

何だ、この無駄にデカイ麻袋は？

そう思いながらも袋を開けてみると……

「むう〜！？ん〜！」

手足を縛られ猿轡をした美女がいました。

1・異世界にこんにちは(後書き)

アレなクオリティでしたが、どうかご容赦を(涙)

2・救助依頼（前書き）

ご都合主義ですね・・・本当にスイマセン。

12/10 フィーナの苗字を変更しました。

2・救助依頼

「頼む！あたしの村を救ってくれ！！」

それが彼女、フィーナ・ネルヴァの第一声だった。

彼女はいわゆるダークエルフで褐色の肌に白銀の髪、そして深紅の瞳という身体的特徴を持っている。

また容姿もつり目に薄い唇、肩までのショートヘアと非常に美しく、その肢体もスレンダーではあるが出るトコロは出ており劣情を抱かずにはいられない。

恐らく彼女が拐われた理由もそこに起因するのだろう。

俺は彼女の住むダークエルフの隠れ里をに侵入した帝国軍一個中隊の撃退を依頼された。

無論、断ったが。

幾ら近代兵器を持っていても数の暴力には敵わない。

圧倒的な数量に押し潰されるのがオチである。

フィーナはその言葉を聞くなり、絶望と俺に対する失望を顔に浮かべる。

だがその代わりに帝国軍撤収後の救助活動を引き受けると言っなり俺に抱きついてきやがった。

現金なヤツめ。

帝国については神とのブリーフィングで幾らかは聞いていた。

この世界を支配する専制君主制の超巨大国家。

神子族みこぞくと呼ばれる全体の5%しかいない支配階層が残りの他種族を統治している。

俺はここまで聞いただけで嫌な予感がした。

その後の事を聞いて自分の予想が正しかった事を知った。

それと言つのも……ん？

「どうしたフィーナ？」

「人の話はちゃんと聞けタケマサ！もうすぐ村だから注意しろと言つたんだ！」

そうか、もうすぐ村か。

まあ、いい。

帝国についての残りはまたの機会に語るとしよう。

さて、一体何人難を逃れた事か……

これからの事を憂鬱に思いながらも俺はダークエルフの隠れ里に足

を進めた。

2・救助依頼（後書き）

みこはミコでも萌えれる巫女ではありませんので。

3・虐殺と凌辱の村（前書き）

残酷描写になってませんね。

3・虐殺と凌辱の村

初めに言う。

事は俺の予想を遥かに越えていた。

「・・・・・・・・」

フィーナも泣き疲れたのか黙りこんでいる。

彼女の村の状況は正に最悪だった。

壊滅なんて言葉では生温い位に・・・・・・・・

壊され炎上する家屋。

なぶり殺しにされたのか損壊の酷い成人男性や老人の遺体。

明らかに凌辱された女性の遺体もあった。

それに一つ気付いた事もある。

フィーナが言うにはこの村における男女比はおおよそ1対1らしい。

だが、村を見た限り圧倒的に女の遺体が少ないし、子供の遺体も殆ど無いのがわかる。

そこから俺は帝国のもう一つの悪弊に思い当たる。

帝国には『聖教』と呼ばれる一神教の国教がある。

何でも神子族の始祖に当たらしい神を祀る宗教らしいのだが、これが至ってタチが悪い。

神子族至上主義な上に、全ては神子族に都合のいい戒律に基づいての生活を他種族にも強制する。

中世キリスト教以上の異端審問に魔女狩りと聖職の売買と、問題点を挙げていったらキリが無い。

その中でも最大の問題点が『聖化』と呼ばれる行為だ。

この行為は聖教の信徒が非信徒と、合意したかしないかを問わず、性的関係を持つ事によって体内の『穢れ』を払い聖教の信徒になる資格を与えるというものだ。

聖教の戒律ではこの行為を奨励しており、このような辺境では日常的に行われているらしい。

そう、神の名の下に弱者に対する強姦が日常的に行われているという事である。

おそらく彼女たちはその『聖化』を継続的に行うために浚われたのだろう。

最初に聞いた時、俺は思わず「どこのカルトだよ！」叫んでしまった位だ。

フィーナの場合は不幸中の幸いと言っべきか、帝国軍の襲撃を見つけた盗賊が奴隷商人に売る『商品』を仕入れるために現れ、彼女を浚った様だ。

そして運良く俺に会い事なきを得たが・・・

取りあえず日も落ちそうだったので、村の裏山の使われていない炭焼き小屋で床を取る事となった。

正直今のフィーナと同じ屋根の下で寝たくないと言っのが本音である。

正直慰めの言葉すらかけづらい。

はぁ・・・神に騙されたかな・・・俺？

3・虐殺と凌辱の村（後書き）

もっと勉強しなきゃですね。

4・ケイヤク（前書き）

本日投稿分はこれで最後です。

4・ケイヤク

幸いにも炭焼き小屋は荒らされた形跡も無く、無事に寝れそうだ。

少し埃っぽかったがそこは神から買った埃取りを使って何とかなつた。

しかし………空気が重い。

あんな事もあつたのだから仕方ないのだろうか……

「ねえ」

！！

突然フィーナが口を開いた。

「アンタこれからどうするんの？」

「いやどうするって………」

フィーナにはこの村に来る道中で一通りの自己紹介は済んでいる。

よって俺が異世界人という事も知っている。

だから特にこれからの予定が無いのは知っているはずだ。

「特に無いのね」

そう言うとフィーネ立ち上がり突如服を脱ぎだした。

「……………」

「……………いやいやいや、何ですかこの超展開は！」

大学4年にもなっても童貞な俺には刺激が強すぎるっすよ！！

完全に思考がフリーズから一気にオーバーヒートへと変わる。

まさに混乱の極み。

「だったらあたしのお願い聞いてくれない？」

そう言いながら俺のほうに近付いてくる。

「なっ、何だよお願いって？」

思わず裏返った声で答えてしまう。

「それはね……………」

そう言うなりフィーナは突然俺の二の腕を力いっぱい掴む。

「おまつ、痛い……………」

どうしたんだ突然、と言おうとするが口から言葉が出ない。

そうフィーナの表情には何とも言えない悲壮な表情が浮かび上がっており、涙まで流していたからだ。

「お願い・・・あたしに力を貸して」

その涙ながらの願いに俺はただ聞いているしかなかった。

フィーナの願い。

それは帝国への復讐を手伝って欲しいというものだった。

復讐なんて・・・と思わなくも無いが、確かにこのままじゃあ彼女の腹の虫も治まるまらないだろうし、如何し様も無い。

これからこの世界で暮らす身としては帝国が最大の障害となるだろう。

異世界人の俺が連中の前にノコノコ出て行ったら即異端審問から即死刑という展開も考えられなくは無い。

かと言って、出会って間もないフィーナ願いを聞く義理もないわけ
で・・・

「それで、俺に一体何の得があるんだよ？」
と聞いてしまう。

「・・・そうね、アンタには特に得になることは無いわ」
だろう？

「その代わり報酬として……」

へ？

「あたしを好きにしていいわ」

ポク……ポク……ポク……チーン

何だ！このエロゲ的展開は！？

「いや、その、いいのか？」

「何、あたしじゃ嫌？」

「いや、好きでもない男に……」

その言葉にフィーナの言葉が詰まる。

「そうね、確かにアンタの事好きじゃ無いわ」

ですよー（笑）

いやいや、本当にアレな展開過ぎて……

「でも」

へ？

でも？

「悪くも無いし、嫌いでもないわ」

「え？ちよっ・・・むっ！！」

そして俺はいきなり唇を奪われた。

「それに・・・」

何ですかフィーナさん、その艶やかな表情は！？

「これから好きになれば問題ないし、ね？」

もうこうなると俺も健全な青年であるわけで、やる事をやっちゃたわけで・・・

神から後で聞いたがサービスとして「チャーム」能力というのをつけてくれたらしい。

何でも会った異性が俺に好意を抱きやすいようになる能力らしい。

何、俺ハーレムまっしぐらじゃん！！

・・・とも思ったが、そんな身分不相应なモノを持つたら後で何かやらかしそで怖いから能力のスイッチをOFF設定にした。

しかし結局、俺はフィーナに協力するという契約をなし崩し的に結び、この夜、俺は男になりフィーナを乙女おとめから女にしましたとさ。

ちゃんちゃん

・・・しかし、腹を括った女の行動力って怖いわぁー。

いろいろと気をつけよ。

4・ケイヤク（後書き）

次回更新はできるだけ早くしたいと思います。
あまり期待しないで待っていてください。

5・出立(前書き)

今までで一番グロく出来ました。

苦手な方はご注意ください。

あと、かなりキンクリです。

時間軸が分かり難いのはどうかご容赦を。

5・出立

フィーナが放った01式軽対戦車誘導弾がオーガの頭を吹き飛ばした。

これで三匹目。

一匹目はM82A1による狙撃で頭を吹き飛ばし、二匹目はC4をたっぷり仕込んだトラップで木っ端微塵にしてやった。

三匹目も始末し残りは二匹。

その内の一匹に俺は照準を合わせ引金を引いた。

得物はAA-12、弾丸はFRAG-12の榴弾。

それをフルオートでお見舞いする。

瞬間間に20連装のドラムマガズインは空になり、喰らったオーガも満身創痍って感じた。

あっ。

フィーナのヤツがだめ押しの01式を撃ち込みやがった。

おいおい、弾薬は出来るだけ節約しろって………！

「ちやほっ」

最後のオーガの一体がフィーナ目掛けて走り出している。

かくいうフィーナは01式の発射筒の交換をしている最中だ。

あいつの持つ護身用の火器じゃあ恐らくオーガを止められない。

俺は背中に背負ったSG550に手を伸ばす。

そしてアンダーバレルに装着されたM320のアイアンサイトでオーガの頭に照準を合わせ40mmの榴弾を発射した。

ポンッ、という間の抜けた音の後に爆発音が続く。

命中はしたものの狙った頭部ではなく背中に着弾してしまったため、止めを刺すには至らなかった。

やはりストックを折り畳んだままの発射はまずかったか……

しかし幸いにもオーガの関心はフィーナから俺に移り、最低条件はクリアされた。

俺は急ぎストックを伸ばし、直ぐ様M320をスウィングアウトして次弾を装填すると、オーガに向かい走り出す。

SG550で牽制しながら距離を詰める。

やはり5.56mm弾では足止め位にしかない。

オーガは左手で顔面を狙う5.56mm弾を防ぎながら右腕を横に薙ぎ払った。俺は前方回転受け身でそれをよけ、再びM320の照

準をオーガの頭に合わせ引き金を引いた。

カチツ・・・

「・・・・・・・・まずっ」

不発った。

その事実には背筋が凍る。

直ぐ様またトリガーを引けば発射されるかもしれないのに、焦った俺は一回弾を取り出し再装填するという、今考えると何とも間抜けな行為に時間を費やしてしまった。

そして再び照準を合わせようと顔を上げるとそこには右腕を振りかぶったオーガの姿が・・・・・・・・

万事休す。

そう思ったら瞬間、一筋の線がオーガまでの伸び、その顔面に直撃した。

それがフィーナが放った01式の弾頭だと分かるまで暫く掛かってしまうほど俺は冷静さを失っていたみたいだ。

ほっと胸を撫で下ろした俺のところにフィーナが歩いてきた。

「フィーナ、さっきは助かった・・・」

言葉の途中でフィーナから平手をお見舞いされた。

「……なんであんな無茶な事をするのよ！アンタは！！」

怒りの表情を浮かべながらも、その目には涙を溜めている。

「……すまん」

俺にはそれしか言えなかった。

そしてフィーナは俺の胸板に額をあてた。

「姉様がいなくなった上にアンタまでいなくなったらあたし、どうしたらいいのよ……」

消え去りそうな声でそう呟く。

「本当にすまない。許してくれ」

その言葉にフィーナは顔を上げて「許さない！」と言い放ち、「今晚、朝までシしてくれなきゃ許さないから！！」と言葉を閉め括った。

……ナイスツンデレ。

そう思いながら、俺はフィーナの怒りを静めるために、彼女の唇に自身の唇を重ねた。

俺とフィーナは襲撃の犠牲者を茶毘に付し一ヶ所に埋葬すると、ダークエルフの隠れ里を出た。

幸いに犠牲者の中にフィーナの唯一の肉親である姉の姿は無かったが、見知った人々を埋葬するフィーナの表情は終始暗かった。

隠れ里を出た後の俺達は対モンスター相手の用心棒の真似事をしながら日銭を稼いでいる。

その為にフィーナにも火器を渡し使い方をレクチャーした。

幸いにも飲み込みが早く、瞬く間にかなりの腕になっていた。

そして、段階を踏み退治できるモンスターの階級も上がっていき、今ではかなりの日銭を稼げるまでになっており、一部の同業者からは『鉄血夫妻』なんて呼ばれている。

そんなこんなで時間は過ぎてフィーナと出会ってから既に半年が経っていた。

「いい〜！あんたはりえー、しょーゆーこみやかいときよろのはいりよぎゃー……」

オーガの討伐が終わり、拠点としている宿屋の一階にある食堂兼酒場でフィーナは盛大に愚痴を溢している。

主に俺に対する愚痴を。

店主や常連は「またか」という表情で苦笑し、新参の客は彼女の声よりもその扇情的な服装に釘付けになっている。

胸の谷間を強調させるチューブトップにくびれを強調させる為が付

けたコルセット、その上にはジャケットを羽織っており、胸元にはドックタグが輝いている。

下の方は、タイトなミニスカートにシルクのショーツ、そしてガーターベルトにストッキング。

そして足元は膝まで有るうかというロングブーツで固めている。

色は全て黒で統一されており、ストッキングとガーターベルト、ショーツ以外は革製である。

最初に会った時の『村娘ルック』と比べると雲泥の差である。

……主に性的な意味で。

元々これをフィーナに与えたのは何を隠そう俺であり、テーマとしてはスレンダー&セクシー&クール&ダークというしっちゃんかめっちゃかなものだ。

最初はフィーナも恥ずかしがったものの、今では周囲からの視線にも慣れた様だ。

聞きたくも無いかもしれないが、俺の服装も一応説明しておこう。

いや頼むから聞いて下さい。

尺が持たないので。

下は黒のカーゴパンツに半長靴を模したブーツ。

上は灰色のTシャツに赤系統のチェックのYシャツを腕捲りしている。

その上にサスペンダーとピストルベルトをつけ、更にその上に自衛隊制式の戦闘防弾チョッキ2型を装備している。

そして胸元にはフィーナとお揃いのドックタグ。

お互いに二個ずつ作り一個ずつ交換している。

いい加減に話を戻そう。

俺が神から買ったマツカランをロックでちびちびやってる間に、フィーナはワインのボトルを二本空けておりすっかり出来上がっていた。

こうなると始末が悪く俺も……

「タアキエマシヤア聞いてンのお〜!!」

はいはい、聞いてますよ、と言おうとしたその時だった。

五人の男が乱暴に扉を開けて酒場に入ってきた。

そしてその頭らしき男が俺とフィーナの前にやって来る。

「タケマサ・アリサカにフィーナ・ネルヴァだな？私は聖教異端審問官のテーベルである」

随分と尊大な態度の男だな。

一応、店主に合図を送り他の客を店の外に誘導させる。

彼の振る舞ったカクテルの名は、モトロフのカクテル。

俗に言う火炎瓶である。

異端審問官は火だるまになりながらも、近くにいた部下の一人に助けを求め、抱きついた。

抱きつかれた方は堪ったものではなく、彼もみるみる火だるまになっていく。

狼狽する残りの三人の中で一人だけ冷静さを取り戻し、剣を抜こうとしたが……

「抜かせないよ」

彼を含めた三人はフィーナ愛用のP90から放たれた5.7mm弾の餌食となった。

審問官の方かというと、既に事切れており、組伏せられた残りの一人が悲鳴を上げている。

「五月蠅いなあ」

耳障りに思い、俺は右膝のレッグホルスターにあるP226を引き抜くなり、悲鳴の男に9mm弾を五発お見舞いした。

……ちよつとオーバーキルだったかな？

まあいいや。

俺は壁に立て掛けてあったSG550を手に取りセフティを解除する。

そして、ドアを破り入ってきた審問官の手勢の一人の腹に40mmの榴弾を撃ち込んだ。

悲鳴を上げながら狼狽する男であるが、その数秒後に男の腹部は爆散し辺りに肋骨と内臓と肉片をばら蒔いた。

爆風を喰らい手足が吹き飛び恐慌状態に陥る者や、吹き飛んだ肋骨が喉に刺さり息絶えているもの。

内臓や肉片、そして血を浴びて狂乱する者など様々である。

俺とフィーナは、その血と肉片の雨をテーブルを盾にやり過ごし、攻勢に転じる。

最早統率など無い烏合の衆は次々と物言わぬものと化していき、掃討すんなり終了した。

聖教の異端審問官の特権として褒賞金制度がある。

異端者を告発し、立件されれば、被告の財産の二割を褒賞として告発した審問官に与える制度だ。

三権分立はおろか政教分離すら未知の価値観である帝国では、立件＝有罪という図式が成り立っているため、審問官の間では褒賞金目当ての告発や、目を瞑る代わりの贈収賄が横行している。

この審問官も恐らくはその類いであろう。

神への信仰も金次第という事力ネ・・・

・・・全くもって嫌になる。

「タケマサ。まだ外に何人かいるみたいだけど、どうする?」

「分かりきった事聞くなよ、フィーナ」

そう、出ていくなら正面から、堂々と、だ。

俺はSG550のマガズインをタクティカルリロードし、M320にも榴弾を装填すると、それを背中に担ぎ、代わりにAA-12にバラ弾を装填した20連のドラムマガズインを装着する。

フィーナはハンドグレネードのピンを抜き、ドアの外に投げる支度をしている。

「全く、全くもって嫌になるわね。タケマサ」

「ああ、とつとと終わらせて、お前と朝までやりたいよ。フィーナ」

そう軽口を喋りながら俺達はドアへと歩きだした。

その途中、榴弾を撃ち込んだ男の死体が目に入った。

・・・
喰えねえな。
あ、暫く肉は

こりゃ・・・

5・出立(後書き)

酔っ払った状態で編集するものじゃあ無いですね。
すみません。

6・道中にて(前書き)

何かご都合主義過ぎますね。

おまけにこのエロゲー設定は・・・

何とかせねば。

6・道中にて

「えーと、次の別れ道は……?」

「タケマサ、左だよ、そこは」

酒場での大立ち回りから三日後。

俺とフィーナは街道に沿って北に向かっていった。

モンスター狩りで十分に資金を蓄え、第一目標を達成した俺達は第二目標である安住の地の探索に乗り出し、その候補に今向かっている。

帝国が全土を支配し、聖教の影響力が強いこの神聖大陸であるが、幾つか自治が認められ帝国や聖教が容易に介入出来ない例外も存在する。

一つがアウレリウス大公国。

皇帝家の血を引く三大公家の一つであるアウレリウス家が治める国で、龍兵団と呼ばれる精鋭部隊を擁する北方の雄である。

また、大公が他の貴族よりもリベラルな事もあり、他の帝国領土と比べ聖教の勢力がかなり抑えられており、少くとも他の帝国領土よりは安全であるらしい。

そしてもう一つが今回の目標である北方自由都市群である。

菱形に近い形をした神聖大陸の北端にある自治都市の集合体で、三つの大都市から構成されている。

いずれの都市も傭兵、娼婦、侠客、奴隷商人、学士など帝国が余り好意的に捉えていない職業がそれぞれの都市で幅を利かせている。

聖教の戒律に基づけばいずれの職業も異端に属するのであるが、かといっていずれの職業もそれなりにうま味や利用価値があり、完全に刈り取ってしまうには惜しいのと、滅ぼすリスクが余りにも大きいため大陸の北端に押し込んだ形でこの北方自由都市群は成立した。

今、俺たちが向かっているのは自由都市群の南端に位置する『傭兵と娼婦の街』、カザルガだ。

「でも何で自由都市群に、しかもカザルガなんて物騒なトコに行くのよ。さっさとアウレリウス大公国に行った方がいいんじゃない？」

「まあ、こつちにも色々必要なモノがあるんだ。それを手に入れる為にカザルガに寄るんだよ」

「必要なモノって……！まさか、情婦じゃあないでしょうね！？」

「あのなあ……ファイナ、生憎俺は今のところ女はお前一人で十分に足りてるよ。俺がカザルガに行くのはもっと別の理由があるからだよ」

「今のところって……一体どういう意味よ……！」

やっぱりそっちに食い付きますか、ファイナさん。

あー仕方ない、説明するか。

「お前が俺の子供孕んだら、俺の相手出来ないだろ。その間、俺に毎日半日マスかいて過ごさせていうのか？」

以前、フィーナが体調不良で一人で性欲を処理した時があったが、満足するまでに半日も掛かってしまった事があった。

この時思った、もしフィーナが子供を孕んだら俺の性欲はどうなるのだろうか・・・

最初はフィーナに口で処理して貰うことも考えたが、以前に口だけで済ます筈が、俺が暴走していつも以上に激しく事に励んでしまったという前科が有るためこの選択肢は除外された。

だったら我慢すればいいんじゃないかと思うだろうが、神が俺を絶倫にした副作用で一定期間女を抱かないと性欲が理性を侵食し、暴走性欲魔人になってしまふ事がさっきので判明した。

全く、何というエロゲー設定だよと思いなながらも、流石に性犯罪者になるわけにもいかず、毎日半日も自己処理に時間を割くわけにもいかないのです、仕方なく一人の娼婦と長期契約してフィーナが妊娠している間の性欲処理を担当して貰う事にしたのである。

ちなみに女を抱いた場合、その後最低三日は暴走することは無い。

俺の説明に、かつての暴走の被害者であるフィーナは一定の理解を示してくれたが、納得はしていないみたいだ。

まあ、当然だが。

もし俺がフィーナの立場でも同じ事を思うだろう。

これは彼女への裏切り行為でもあるからだ。

当然に不満そうな表情で歩くフィーナ。

「納得してくれとは言わないよ、フィーナ。でも俺はお前との子供は欲しいし、お前と子供に危ない目には有って欲しくないんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺が変な体質のせいでお前に嫌な思いをさせて本当に済まない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・フィーナ」

「・・・・・・・・」

「愛してる」

その言葉を呟くとフィーナは俺に抱きついてきた。

「・・・・・・・・相手の娼婦に本気になったら許さないんだからね」

頬を朱に染めながらフィーナは呟いた。

何とも破壊力抜群な表情を頂きました。

「大丈夫だよ。俺はフィーナの魅力の虜だからさ」

「どうだか、あたしと初めてした時まで童貞だったアンタが言っても説得力無いわよ」

「そこは言わないでっ！！！！」

「おまけにその歳で」

「やめて！俺の心のライフポイントはもうゼロよ！！！！」

そんな軽口を叩き合いながら俺達は北に向かって歩き続ける。

そこに安息の地があると信じて。

6・道中にて（後書き）

何というアホ展開。

我ながら恥ずかしいです。

7・出会い（前書き）

今回は色んなフラグ乱立祭りになります。

読みにくいところや、ご都合主義なところもありますが、どうかご容赦を

。

12/20 トランジスタグラマーという表現をグラマラスに改変。

7・出会い

「あーら、お兄さん。これから私と・・・」

「タケマサ、ととつと宿を取りましょ。もう日暮れだし」

俺に話し掛けた娼婦の言葉をフィーナが遮った。

流石に女付きは客にならないと踏んだのか、その娼婦は近くを歩いていた別の傭兵らしき男に声を掛けている。

この娼婦の他にも辺りには多くの娼婦達が傭兵風情の男達と料金交渉をしたり、交渉が纏まったのか連れ込み宿や路地裏に連れ立って消えていく。

「流石は『傭兵と娼婦の街』ってトコロだな」

そう言い溜め息を吐いた。

ここは北方自由都市群の南端に位置する通称『傭兵と娼婦の街』、カザルカである。

この街には大小含めて百を超える傭兵団の拠点とそれを取り纏める傭兵ギルドの本部と、神聖大陸全土の娼婦を統轄する娼婦ギルドの本部があり、女の軀を求める傭兵と男の懐を狙う娼婦が鎬を削り合い奇妙な熱気を孕んでいた。

「さて、ととつと拠点の宿を探しますか？」

ドカッ！！

そんな事を言っていると、突如15〜16歳位の少年が少し先の宿屋から結構な勢いで転び出てきた。

そして彼らの仲間なのか同じ歳位の少年達が数人宿屋から出てきて転び出てきた少年を介抱している。

「言っただろ、糞ガキ共！！貴様らの連れはこれから俺達に酌するんで忙しいんだ！迎えに来るなら明日にしな！！！」

そう言っつて傭兵らしき粗暴な男とその仲間たちが出てきた。

うわあっ・・・、三下感全開だなあ・・・

厄介事と捨て台詞を標準装備してそんなその雰囲気には俺は辟易しそうになる。

ここは、フィーナを連れてとっ・・・

「おっ、その姉ちゃん達も俺達に酌しろよ！その後は当然・・・」

男は此方を見ながら下品な笑顔を浮かべる。

イラッ

おい、貴様ら。

人の女に手を出すなんて・・・

「ふっ、無粋にも程があるな」

ん？

俺が言う筈だった台詞を御丁寧に、フィーナの隣にいた女が変わりに言ってくれた。

女の身長は170cm代半ばで俺と同じ位だ。

凜とした綺麗な顔に、美しい水色の長髪をポニーテールに纏めてい

る。
胸当てをしている為、大きさは分からないが決して華奢ではなく、
何だかグラマラスな予感がプンプンしている。

「タケマサ、何をアンタは見蕩れてるのよ」

フィーナの怒気を孕んだ言葉に俺は咄嗟に我に還った。

「いつ、いやあ、随分な女丈夫だと思つてさ・・・」

咄嗟に彼女を見詰めていた理由をフィーナに説明する。

「ふーん・・・確かに分からなくは無いけど・・・それだけ？」

・・・鋭い。

彼女が女丈夫と言うことも気になったから見つめていたのも事実だが、彼女の美しさに見蕩れていたというのも、また事実である。

さて、どう誤魔化したらいいものか・・・

「おい、その黒いの！いいからとっとこっちに来やがれぶあつ
！……！」

いいタイミングにフィーナを連れて行こうとし来た男の仲間に一発
撃ち込む。

汚い手で俺の嫁に触れようとした上に『黒いの』だと！？

……………こいつは指導が必要だなあ。

「タツ、タケマサ！？幾ら何でもいきなり過ぎじゃあない？」

いやー、三ヶ月前の酒場での一件もこんな感じだったし、今更じゃ
無い？

それに……

「大丈夫だ。非殺傷弾だから死ぬことは無い……筈？」

「何故に疑問形！……！」

当たりドコさえ悪くなけりゃあ多分ね……

「それよか、フィーナ。これ」

俺はフィーナに手に持っていたAA-12を渡す。

「弾は非殺傷のゴム製だ。そのバラ弾とスラグを交互に十発ずつ

詰めてある」

「はあ、全く用意がいいのね、アンタは」

いえいえ、それ程でも。

さて、そんじゃあ俺の分も出しますかな。

そう思い俺は虚空に右手をかざした。

そして発光したかと思ったらあら不思議。

俺の右手にはAA-12が。

もちろん種も仕掛けも御座いますが、それはまたいずれかの機会に。そして今度は左手を掌が相手らに見える様に突き出すと、右足を軸に一回転し、今度はゴム弾入りの20連ドラムマガズインを次々と地面に置いてく。

「さて、用意は上々。とつとと始め・・・」

「ずおおおああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

どぎざああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・始めなくていいの？タケマサ？」

いや・・・始めようにも、ねえ。

目の前に広がる光景・・・

それはさっきの女丈夫が2mはあろうかという長さの突撃槍ランスを徒歩かちで振り回し、三下連中を吹き飛ばしている光景。

しかし、あの女・・・よく徒歩かちで突撃槍ランスなんて使えるな？

あれって、騎兵用の超重量型武器の筈だぞ？

それを手足の如く使ってる・・・

まさに台風といわんばかりのその光景は圧巻で、女は宿から出てきた三下の増援達も次々に吹き飛ばされていく。

「あ・・・取り敢えず、射撃訓練を兼ねて吹き飛んでく奴らを的にしてみるか？」

「んー、そうね。あいつらムカつくし」

そして俺とフィーナはAA-12の上部に付いたドットサイトの光点と傭兵達を合わせ次々と打ち抜いていく。

「ぶばっ！」

「もげっ！」

「にゅっぎゅ

ん！！！」

「いや、何だ今の悲鳴!？」

悲鳴まで差別化しても、何にもならんぞ？

そんな事をお構いなしに、女丈夫は傭兵達を粗方片付けてしまった。

ここまで無双されてしまうと、こちらも拍手せざるを得ない。

そう思い、手を叩こうとしたその瞬間だった。

「貴様ら、そこを動くな!!」

その台詞に俺とフィーナは声の方向に照準を向ける。

そこには他の傭兵達とは明らかに違う、高級そうな鎧に身を包んだ若い男と少女の首に短刀を当てたその取り巻きらしき男が立っていた。

「ケイティ!!」

さっき転び出た少年がその少女の名前らしき名前を叫ぶ。

「だっ、だから動くなっって言ってるだろ!!」

俺とフィーナの行動や少年の声に動揺したのか、男の声は少し震えている。

「貴様ら、俺を誰だと思ってるんだ!!傭兵ギルド長オドアケルの息子、ロガー・オドアケルだぞ!!」

傭兵ギルド長の息子が・・・これまた厄介な。

これじゃあ傭兵ギルドから目の敵にされるの決定的じゃあねえかよ・
・

はあ、まあいいや。

VSSでも使つて、短刀持つてるやつを吹き飛ばして・・・

「おい」

決して大きくは無い、が、野太くハッキリとした声が辺りに響く。

「貴様ら、俺の子供達に何やってんだ!？」

その瞬間ロガーの取り巻きの一人が吹き飛んだ。

最初、俺も何が起きたのか分からなかった。

だが、そこに現れた圧倒的な存在感を持つ男に俺だけでなく、その場にいた全員の目が釘付けになる。

2mを超える巨体に隆々とした筋肉。

M82A1（バレット・ライフル）でも使わなければ倒せそうに無いと錯覚するぐらいの、偉丈夫がそこにはいた。

「ひつ、おつ、お前この娘が・・・」

「この娘が何ですか？」

今度聞こえたのは丁寧な女の声。

その方向に目を向けるとケイティと呼ばれた少女が、一人の女に助け出されていた。

ちなみに短刀を突きつけた男は地面で伸びている。

「きつ、貴様ら俺はシンダール・オドアケルの息子だぞ！それを分かって・・・」

「おい、小僧」

静かながらも怒気を孕んだ声が辺りに響き渡り、俺とフィーナですら強張るほどの表情でその巨漢は叫ぶ。

「親が子供を助けるのに、理由がいるのか？」

偉丈夫はそう言い放ち、鋼の如き筋肉を動員してロガーの顔面を殴りつけた。

「つづべつぎゃあああああ

！！！！」

最早悲鳴にすらなっていない声を上げながら、ロガーは通り沿いの店に突っ込でいった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はおろかフィーナや突撃槍ランスの女ですら呆然とその偉丈夫を見つめている。

その俺たちに向き直ると、偉丈夫は一言こう言い放つ。

「……………子供達を助けてもらったな。礼を言う」

うわっ、武人の鑑だよ、この人。

7・出会い（後書き）

おまけにキンクリまである回でした。

文中にも会ったように、酒場の大立ち回りから三カ月後となります。

8・宴の前（前書き）

うまく纏まっています。

消化不良な部分も多々あります。

文章を書くって本当に難しいです。

分かり難いかもしれませんが、どうぞ。

8・宴の前

ここはとある宿屋の食堂。

そこで俺達は食事が運ばれて来るのをただ、ただ待っている。

ここまで聞いたただけなら何ともないと思うだろう。

だが、俺が座っている席は所謂、上座で右側にはフィーナが座っている。

そして左側には突撃槍^{ランス}の女丈夫が、他にも同じ机に先程吹き飛ばされた少年に、ケイティと呼ばれた少女、ケイティを助けた丁寧な口調の女、そしてあの2mを超える偉丈夫も座っている。

「ふむ、流石にコレだけの人数の食事となりますと時間が掛るな？」

偉丈夫が不意に口を開く。

そりゃそうだろ。

俺達の机以外にも15歳前後の少年少女が総勢30人もいるんだから。

ファミレスでもかなりてんやわんやになるだろうし、ましてや中世レベルの宿屋の食堂ならば致し方あるまい。

「しかし、よくまあ30人なんて数の孤児を育てようと思いましたね。ミスタ・スパルタクス」

「32人だ。何、それなりに貯えがあったのでな、何とかなるだろうと思つたまでの事。それに……今まで奪つた命の事を思えば……」

その言葉と共に沈黙が訪れる。

ガードルード・スパルタクス

体躯と才能に恵まれ、とある領軍の一兵卒から帝国軍の軍曹まで僅か10年で上り詰めた男。

最終的には練兵部隊の助教にまでなった、平民出身者とするれば、異例のスピードで出世をした傑物であり、士官になる事も夢では無かつたらしい。

だがその輝かしい軍歴にも一つの転機が訪れる。

それはとある地方領での出来事。

小規模な反乱の鎮圧に、彼の担当していた練兵中の部隊が実地研修という形で参加する事になった。

帝国に仇なす逆賊に鉄槌を下せると意気込む新兵達。

だが、蓋を開ければ領主の暴政により困窮した領民達が起こした一揆にすぎなかった。

また、指揮を取った領主や領軍を名乗る傭兵くずれが足を引っ張った事もあり、彼のいた部隊は指揮官も戦死し、消耗率八割という壊滅的打撃をうけてしまう。

しかし事はそれだけでは終わらなかった。

勝利するなり領軍が領民達への暴行や略奪を開始したのである。

領主に取り合おうにも、領民への仕置きとか領軍への褒美という信じられない回答しか帰ってこない。

そして悲劇が起こる。

彼が領主に陳情に行ってる間に、蛮行を行う領軍と、それを止めようとする新兵達の間で衝突が起こり数に劣る新兵達が皆殺しにされてしまう。

彼が領主の元から戻って目にしたのは、苦楽を共にし、立派な兵士になるように育てた新兵達の亡骸とその横で略奪と凌辱を繰り返す領軍兵士達の姿だった。

彼はその時自分の中で何かが切れた様な感覚で有ったと語っている。脳裏には在りし日の新兵達（教え子たち）の姿が浮かび上がり、かれらの無念が手に取るようにわかった。

彼らの無念を俺以外に誰が晴らす、と思っていたのではないかとガ

ードルードは回顧する。

我を取り戻した彼が最初に目にしたのは、先程まで暴虐の限りを尽くした領兵達だった肉片であった。

そして彼の手には血濡れた愛用の斧ハルバード槍。

自身が怒りに任せてやったのは明白であった。

その時、彼は乾いた笑いを零し、これまでの自分の存在に意味があったのか、疑問に思ったという。

何の為に兵士になったのか？

何の為に新兵達を育てて来たのか？

何の為に此処に来たのか？

何の為に領軍の兵士達を殺したのか？

そして……自身は、何の為に生まれて来たのか？

自暴自棄に近い気分で、彼は領兵達を殺し続けたらしい。

それまで自分が築き上げてきたモノが全て全て無意味な空想みに感じられたようだ。

かくいう自身も似たようなもの。

自分という輪郭が徐々に朧気になり始め、最早、ただ生きているだ

け、という感じであったと彼は語っている。

そしてひたすらに殺し続け、時間の感覚すら曖昧になり始めた頃、彼は一つの家屋にたどり着く。

村落の端に位置した為、その家は荒らされていなかったらしく、中は綺麗なまま。

だが中に領兵が潜んでいるかもしれない。

そう思った彼は、家屋の物色を始める。

片っ端から扉をぶち破り、誰かが潜んで居ないか一部屋一部屋確認していく。

そして最後の一部屋に取り掛かる。

いる。

扉の向こうには複数の人の気配。

だが、そいつらが何人居ようが何をして居ようが関係はない。

どうせとつと殺すのだから。

そう思いながら、彼は扉をぶち破り、斧槍ハルバードを振りかぶった。

が、部屋の中の光景を見るなりガードルードの手が止まる。

短剣を握る震えた手。

それ自体は何ら珍しくはない。

そう、それを握っているのが十代半ば位であろう少女という事を除いては……

彼女の後ろには30人を超える恐らくは10歳にも満たない子供達が声を殺し、身を寄せ合い震えていた。

何故そんなに震えているのか？

それが、ガードルードが彼女達を見た最初の感想だ。

ああ、斧じよ槍こに怯えているのか？

そう思い、ふと壁に掛けてあった大鏡が目に入った。

……誰だ、これは？

鏡に映ったのは、狂気に染まった巨漢。

それがガードルード自身だと彼が気付くのに数秒の時間を要したという。

それと同時に思考が急激に冷却され自身が行ってきた所業が脳裏に蘇る。

彼が殺したのは領兵ではなかった。

領兵達に組み伏せられ陵辱されていた女たち諸共、領兵達を殺した。

女たちも・・・殺した。

その時、自身が領兵達と同じ獣道に堕ちてしまったと悟ったと言う。

結局は新兵達のあだ討ちと意気込んだが、結局は領兵達と同じ穴のムジナ。

ならどうすればこの罪を償える。

そう思い彼は再び子供達を見る。

そくだ、この子供達を育てよう。

そして、子供達を幸せにしよう。

償いきれるかどうかは分からない。

安直な答えかもしれない。

ただ自身の罪を偽善で塗り潰しているに過ぎない。

だが、彼はそうせずにはいられなかったらしい。

その場に泣き崩れるガードルード。

それを見た短剣を持った少女は泣き崩れる彼に近付き、その頭に手を乗せる。

その時、僅かではあるが、彼の心の重みが少しだけ軽くなった気が

したらしい。

彼はそのまま、その短刀の少女、ユ・ラ・クラックスを抱きしめた。

………重い。

……話が重過ぎる。

確かに彼らを知る上では避けられない事ではあるが………

タイミング的に、ねえ？

せめて食事が終わってからでも良かったのではないかと思ってしまう。

不意の沈黙と共に自身と子供達の身の上を話したガードルードだが、もう少し考えて………

「湿っぽくなってしまって申し訳ない」

いや、いいんだけどさ………

「おっ、そろそろ料理が出来た様だ。ケイティ、ヨシユア、済まないが給仕を手伝ってもらっていいか？」

そういうとケイティと転がり出た少年、ヨシユアが席を離れ料理が置かれたカウンターの方へと向かっていく。

やれやれ、ようやくと食事であり付ける。

それよか、なんでガードルド達がこの街に来た理由も、大体予想は付くが、聞かなければならないし、突撃槍ランスの女、ミス・トラヤヌスからも色々と事情を聞かなきゃあならなし………

はあ……

今夜は酒抜きかな………

俺は席について何度目かのため息を吐いた。

8・宴の前（後書き）

うーん、ガードルードの身の上話だけで終わってしまった。
もっとうまく纏められるようになりたいです。

9・宴の最中（前書き）

前話よりはまともに出来ました。
前に続いて暗めです。

9・宴の最中

丁寧な口調の女、ミス・クラックスの説明によってガードルード達の大体の状況は分かった。

彼女を含む孤児達を七年間養ってきたこと。

その元手となっていたガードルードの貯えがもう残り少なくなってきたこと。

そして、生活の糧を稼ぐためこの街カザルカに來たということだ。

彼らは護衛専門の傭兵団を結成し、男は護衛要員として、女は事務や後方支援要員として働かせるつもりだそうだ。

子供達を幸せにするために、彼等を危険へと送り出す。

何たる矛盾。

……とは思ったが、実際仕方がない事だと俺は思った。

幾ら贖罪の為とはいえ、全く血の繋がりがどこるかそれまで全く無関係だった子供達を七年間も育てている。

普通この様な事が出来るだろうか？

恐らくは大抵の者が我に返るなり、自身の罪の呵責に耐えられずその場から逃げ出すか、一部は殺戮の快楽に侵されるか自身の罪を知る者を消すために、その場で子供達を虐殺したかもしれない。

しかし、彼は子供達を育てるというある意味、最も困難でずっと罪と向き合わねばならない道を選んだ。

恐らく彼は一生罪と向き合わねばならず、許されることもない。

そして罪の上に重ねた偽善。

その事を彼自身理解している。

だからこそ言える。

彼の偽善はどこまで尊く、どうしようもない位に美しい。

自身の罪を罪と認めぬ者が多い中、自身の罪と向き合い生きていく・

並みの人間ならば出来る事では無いだろう。

そんな事を考えながら、食事を口に運ぶ。

「ほう、ではガードルド殿にとってユーラ殿は娘の様なもの？」

「その通りだ。一番年上であつたという事もあり下の子供達の面倒を見て貰っている。まあ、長女の様なものと思つて貰つて結構だ」

ガードルドと突撃槍ランスの女、リアレス・トラヤヌスの取り留めの無い会話。

その隣で落ち込むミス・ユーラは置いていて、夕食は和やかな雰囲気

気で進んだ。

ガードルードの身の上話でどうなるかと思ったが・・・

ミス・トラヤヌスが話題を振ってくれるので色々助かっている。

他の机でも少年少女達が談笑をしながら食事を食べていた。

「それではガードルード殿の話はここまでにして、次はタケマサ殿に聞きましょうか？」

ほうほう、許したわけでも無いのにいきなりファーストネームで呼ぶとは少し不躰ですね、ミス・リアレス。

まあ、そういう性分みたいだし怒りはしないけどね。

「で、何を聞きたいの？」

俺は素っ気なく返す。

「はい、ガードルード殿への質問と似たようなものでして、タケマサ殿にとってフィーナ殿はどのような存在なのかと・・・」

「嫁」

俺は即答する。

その返しに、ミス・リアレスは少し驚いた後に得心の表情を。

ガードルードは表情を特には変えていないが、隣のミス・ユーラは

羨まじげな表情を浮かべており、ケイティとヨシユアは聞き逃したのか疑問符が似合う表情を浮かべている。

そして、フィーナに関しては当然という表情を浮かべながらも頬を赤く染めている。

クソツ、可愛いなフィーナ、コンチキショー。

ベッドの上だった押し倒してろぞ。

「ほう、では何故この街にいらしたので？」

「聖教が嫌いだね。取り敢えず聖教の影響力が少い北方に来たってわけ。でないとおちおち子供も作れないし、聖教のヤツラにフィーナの軀を差し出すのは真つ平ごめんだしな」

フィーナは俺のモノだ。

誰にもやるつもりは無いし、奪おうとするヤツラには容赦はしない。

所詮はちんけな独占欲と征服欲だ。

だが、これが有るからこそ俺はフィーナがどうしようもなく愛しい。

「そこまで聖教が嫌いとは、何か因縁でもお有りですか？」

因縁も何も、俺とフィーナの馴れ初めに聖教の暗部が関わっている。

俺は自分が異世界人という事を伏せて、フィーナとの馴れ初めを話した。

九ヶ月前のフィーナの故郷であるダークエルフの隠れ里での惨劇を。
三ヶ月前の酒場での大立ち回りを。

最初は俺のいるテーブルのやつらだけが耳を傾けていたが、話を終える頃にはテーブルの回りに他のテーブルにいた子供達が集まっていた。

辺りを沈黙が支配する。

ガタツ

そんな中、一人がその沈黙を破る。

「どうかしたか、ミス・リアレス？」

突然立ち上がった彼女に俺は声を掛ける。

その表情はさつきとは違い、神妙な面持ちだ。

「フィーナ殿、まずは謝らせてくれ」

そう言い頭を下げた。

話が見えない。

何故彼女がフィーナに謝るのか？

そのまま彼女は続ける。

「私は嘗て、聖教の聖乙女騎士団に所属していました」

聖乙女騎士団。

厳しい試験や訓練をくぐり抜けてきた処女だけが所属することを許される、女だけの騎士団。

聖教直属の戦力の一つで、その権威は帝国軍よりも上だ。

「私は九月前にある村落の異端審問に監督官として参加しました」

この言葉と俺は一つの推測を立ててしまう。

「その村落は所謂『隠れ里』で大陸中央部の山奥にある2000人程度の小さなものでした」

おいおい、これって……

「その村落を帝国軍の一個中隊で強襲したのです」

もしかして……いや、まさか!!

「その村落の住人は……」

俺はフィーナに視線を移す。

その顔に最早表情は無い。

「貴女と同じダークエルフでした……」

その彼女の言葉に皆の表情が固まり、その場の空気が凍結した。

案の定。

俺の予想した通りじゃねえか。

つまりミス・リアレスはフィーナの故郷をあんなにしたヤツラのひとりだったわけで・・・

「そう」

少し間を置いて一言、そう言うと、フィーナは立ち上がり腰のホルスターからFive-sevenを抜き、ミス・リアレスの頭に突き付ける。

大抵の子供達はその行動に首を傾げるが、先程AA-12を見て、今フィーナが握るそれが同質のモノと理解した者達はその行動に目を見開いた。

「一つ、いい？」

不意にフィーナが口を開く。

「黙っていれば、あたしは多分アンタが仇だなんて気付かなかったわ。なのに何で名乗り出たの？」

もったもな質問だ。

恐らくミス・リアレスは言えばこうなる事が分かっていた筈だ。

それなのに何故、フィーナに自分が仇だと告げたのか？

「聖教の教えには『弱者には手を差し伸べよ』というモノがある」
頭を下げたままミス・リアレスが喋り出す。

「だが貴女の故郷での行いはそれに反していた。隊長は『異教徒に対する聖化の為だ、仕方なかるう』仰っていたが、私には野盗が村を襲うのと同じにしか見えなかった」

破壊され、火を放たれる家屋。

蹴り殺される男や老人。

陵辱される女や子供たち。

その姿を彼女はしっかりと見たのだろう。

苦渋に満ちた表情がそれを物語る。

「私は分からなくなった。弱き者を助けるために聖乙女騎士になったのにやっっている事は聖化の名を借りた傍若無人すら生温い行いは、畜生のそれではない」

彼女の瞳に涙が溜まり……

「私は　　こんな事をする為に聖乙女騎士になったのではなかった……」

……そしてこぼれた。

そして彼女は出奔という道を選んだのだろう。

しかし、他に道は無かったのだろうか？

その場で隊長に異議を申し立てる事も出来たかもしれないし、同志を募って聖教に働きかけることも不可能ではなかった筈だ。

これは一種の『逃げ』なのではないかと思ってしまう。

だが、異議を申し立てたとしてそれが隊長の心を動かすとは限らないし、運が悪ければ裏切り者として彼女もフィーナの故郷の女たちと同じ運命を辿ったかもしれない。

同志を募っても、集らないかも知れないし、密告され異端審問に掛けられたかもしれない。

『かもしれない』ばかりの堂々巡り。

決してベストな答えは出てこないだろう。

そして、その出奔という彼女が選んだベターな答えを、ベストな答えには出来ないが、限りなくベストに近づけるしかないのだろう……

彼女、リアレス・トラヤヌスの心は決して強くは無い。

だが、教義の名の下に行われた暴虐を是とせず、出奔という道を選んだ彼女の心と精神は気高いモノだ。

少なくとも俺はそう思う。

その彼女を責める資格は俺には無い。

彼女の咽び泣く声だけが食堂に響く。

「……………っちっ!!」

フィーナはそう舌打ちを、ミス・リアレスに突きつけたFive - sevenをホルスターに納めた。

「許したのか？」

俺はフィーナに聞く。

「……………許す訳無いでしょ」

ミス・ユーラやガードルドの子供達がミス・リアレスを慰めている中、俺とフィーナは食堂の外へと出る。

「おそらくアタシはあの人を一生許すことは無いと思うわ」

当然だろう。

ミス・リアレスやガードルドがその自身の罪と一生向き合わなければならぬのと同じように、フィーナも自身の心の傷と生涯付き合わねばならないからだ。

「まあ、許せないのは分かるけど苛めるのも程々にしておけよ。彼

女だって苦しいんだからな」

「何よ、あたしのことよりもあの女の心配をしてるわけ？」

ヤベツ、地雷踏んだ。

こうなると、機嫌がすぐ悪くなるんだよな・・・

「タケマサ」

ホラ来た。

「あたし、凄く機嫌が悪いんだけど？」

はいはい、分かりましたよ、お姫様。

そして俺はフィーナの唇に自身のそれを重ね、舌を絡めた。

濃厚で、官能的な口付け。

「今夜は寝かさないわよ。徹底的に絞り尽くしてあげるから覚悟しなさいね」

アイアイ、願ったり叶ったりだ。

そう心の中で呟くと、俺はフィーナの肩を抱きながら食堂へと戻っていった。

9・宴の最中（後書き）

出来たら年内にあと1〜2話投稿したいけれど、出来るかどうか。あまり期待せずにお待ちください。

10・宴のあと（前書き）

年内の投稿はこれが最後です。

本年お付き合い頂いた皆さんに御礼申し上げます。

今回も説明が多く、急展開な部分もありますが、どうかご容赦を。

10・宴のあと

「全く、少しは相手を考えて殴って欲しいものですね」

その男がやって来たのは、食事も終わり片付けを始めたばかりの時であった。

些か呆れた感じでトゲのある敬語を吐く二十代前半の男。

俺と大して年は変わらないが、この若さで『侠客と奴隷の街』ザールに本拠を構え、北方自由都市群を牛耳る侠客集団『コルスカツツエ・ファミリー』の若頭に登り詰めた逸材、ロッケン・シシリーである。

この街のカザルカコルスカツツエ・ファミリーの支部長を務めており、この街の顔役の一人と言えるだろう。

昼間の、ロガー・オドアケルとの一件が耳に入ったらしく、俺達にこれ以上厄介事を起こさないよう釘を刺しに来たらしい。

「全く、ロガー君も最近はヤンチャが過ぎる。昔はあんなにいい子だったのに」

？

ロガーがいい子？

「おい、あの七光りがいい子って一体どういう事だ？」

俺はシシリーに聞く。

「ああ、貴方達はこの街に来たばかりでしたね・・・」

あの七光り、もといロガーが狼藉を働く様になったのは一年ほど前、18歳になった頃かららしい。

それまでは、良く言えば豪放磊落、悪く言えば粗野な父、シンダールとは違い謙虚かつ細部まで気配りが出来、武術はからきしながらもギルド長の息子として組織運営や規律の強化などに辣腕を振るったといい、市井の評価も上々だったらしい。

ところが一年前に彼の母が死に、父が後添いを貰った頃から態度が一変しだしたそうだ。

理由として父親に跡継に不相応と言われたとか、継母との折り合いが悪いからとか様々な原因が噂されるが真相は定かではない。

だが、今では街一番の厄介者に成り下がったのは言うまでもないが・・・

しかし、謙虚な男が豹変するには些か材料が足りない気がする。

確かに母の死が要因の一つであるのは明らかであろうが、残りはあくまで噂に過ぎない。

・・・後で裏を取ってみるか。

「まあ、今回はロガー君にも非があったので両者への訓告というか
たちで手を打ちましたが、こちらとしても北方自由都市群ノリスカの顔役と

しての面子が有るものでしてね。それで貴方達に自重して頂きたくて来た次第で……」

確かに。

尤もな事だろう。

自治が認められていると言うことは治安維持も自分達で行わなければならず、それを遂行する者達にはそれ相応の実力と強固な規律が必要である。

北方自由都市群でそれに最も当てはまる集団がコルスカツェ・フアミリーだったのであろう。

首領^下を頂点としたピラミッド型組織。

それを律する沈黙^{オメルタ}の掟。

これらが基となり傭兵達ですら迂闊に逆らえない強力な自警機構として、今現在機能している。

その彼等としてみれば、顔役として騒ぎを起こしそうな連中に釘を刺すのは当然だろう。

「わかったよ。こっちからは手は出さない。それに何かあったらそちらに話を通す」

「そういう事では……まあ、いいでしょう。ただ、出来る限りロガー君には近寄らないで下さい」

「どっつて？」

「まあ、傭兵ギルドにも色々あるんですよ。あとはご自分で調べて下さい。私も忙しい身の上でしてね」

そう言い、シシリーはここを後にした。

んー、話を聞く限りは跡目争いか何かか？

シンダールも結構な年齢らしいし、後妻との間に新たに男児が産まれたとも聞く。

グレた愚息より歳を取って出来た息子の方が可愛いのかな？

まあ、俺もそのうち父親になるだろうから、いずれ分かる時もあるかもしれない。

幸いにも俺には愛しいスーパーセクシースレンダーエロチッククルビューティーな嫁、フィーナがいるから……？

そっぴやフィーナはどこ行った？

片付けを始めた時はいた筈だか……

「なあ、フィーナ知らんか？」

俺は近くにいたヨシユアに声を掛ける。

「フィーナさんですか？それならさっき気持ちが悪いとか言って、厠に行きましたけど……」

随分遅いですよね、とヨシユアが言い終わる前に俺は厠へと向かった。

何か胸騒ぎがする。

しかしそれは何故か悪いものではない。

一抹の不安を抱えながら、俺は厠に飛び込んだ。

「はあはあ……タ、タケマサ……うっ」

そこにはさつき食べたものを戻しているフィーナの姿があった。

俺の頭が真っ白になる。

次の瞬間には俺はフィーナを、所謂お姫様抱っこで抱き抱え、「医者には居ないかッ!!!」と大声をあげながら表の通りに駆け出していた。

さつき食べた物の中にフィーナの体に合わない物があったのか？

それとも食中毒か？

兎に角医者に診せない事には始まらない。

医者だ、何がなんでも医者だ!!!

「何だい、あんた。騒がしいねえ」

狼狽しながら医者、医者と叫ぶ俺の前に恰幅の良さげな中年女がやって来た。

「診せてごらん。あたしゃ、こう見えても医者だがね。ここで手当てという訳には行かんが、容態ぐらいは分かるよ」

そう言いながら、彼女はフィーナの容態を診始めた。

時折フィーナから体の様子を聞き、五分としない内に何かに得心した様な表情をし、俺を見た。

「あんた、この娘の旦那かい？」

「あ？ああ、そうだが・・・」

「一体何だ？」

「いいからフィーナの容態を教えろ。」

「何だい、折角のおめでたなのに、旦那のアンタがそんなんでどうすんのさ？」

「いいから！フィーナの容態はどうなんだ！？」

最早パニックな俺はとっとと容態を言わない女医に食って掛かった。

「やれやれ、女房のつわりにここまで狼狽する旦那も珍しいね」

そう言いながら大笑いする女医。

何がそんなに可笑しい……ん？

おめでた？

つわり？

これって……!!!!

「ようやっと分かったかい、お父さん」

俺はフィーナを見つめる。

「この娘の腹には、アンタのやや子がいるよ。まあ、三ヶ月ってト
」口だね」

10・宴のあと（後書き）

はい、フィーナさんおめでたでした。

こんな早い状況で主人公を子持ちにするという暴挙に打て出ましたが・・・

あまり責めないで下さい。

再起不能になるので。

つわりに関する描写や、コルスカツエ・ファミリーに関する描写が力押しな部分も御座いましたが、どうかご容赦下さい。

前書きでも述べましたが、本年の投稿はこれが最後となります。

私の拙い文章に本年の短い間付き合っていたいた皆様、本当にありがとうございます。

来年もこんな私ですが広い心でお付き合い頂ければ幸いです。

それでは皆様、良いお年を。

敬具

11・新たな懸念（前書き）

新年明けましておめでとございます。

本年もよろしく願います。

因みに新年になって更新速度が落ちます。

週一ぐらいを維持できたらいいなと思っています。

こんな私ですが願います。

では、新年一発目どうぞ。

11・新たな懸念

「はぁ………」

俺は盛大に溜め息をついた。

この溜め息には様々な意味が込められている。

昨夜、フィーナの懐妊が分かったのだがそれからが大変だった。

妊娠がわかった途端、待望の子供に感極まったのか俺の胸でフィーナは泣き出すわ、ガードルードの子供達やリアレス達が胴上げしだして、そのまま宴会突入。

そのまま朝までどんちゃん騒ぎと相成った。

あつ、因みにフィーナはノンアルコールでした。

お腹の子供に悪影響があったら堪らないしね。

一見溜め息を吐く理由が見当たらないだろう。

そりゃそうだ。

フィーナの妊娠が嬉しくない訳がないだろ！

フィーナの妊娠が分かった途端俺は、「よっしやああー！！！！
！」っと、ガッツポーズをってしまった位に。

俺にとつての初めての子供。

父親となる不安も当然あるが、同時に自分とフィーナの子供がどんな子か？

男か女か？

髪の色は俺譲りの黒か、フィーナ譲りの白銀か？

瞳の色は？

どんな性格になって、どんな風に育つのか？

やべえ、子供が出来る事って、父親になる事ってこんなにも期待に胸が膨らむものだったのか。

かつては俺の親父やお袋が、そして今は俺とフィーナが心を踊らせている。

……だが一つだけ、そう一つだけ懸念事項がある。

そう……俺の性欲の問題。

前にも言ったが、神のお陰でアベレージな日本人だった俺は絶倫な精力と股間のビクキヤノンを手に入れた。

だが、その代償として三日に一度女を抱かないと性欲が暴走し、性欲魔人になってしまうのは以前にも説明した。

その被害をフィーナや他の女に与えない為に娼婦と長期契約を結び、

フィーナが妊娠している間の性欲の処理をして貰う予定となっている。

溜め息の理由はここだ。

フィーナの同意があるとはいえ、不貞を働くのは気分がいいものではない。

だが、いくら子供と母胎を危険にさらすわけにはいかないし、俺も性犯罪者にはなりたくない。

その上、昨夜の宴会でフィーナとこの事を相談していたらケイティに聞かれたらしく、終わりにはガードルド・チルドレンズ女性陣から非難の集中砲火を受けた。

まあ最初は甘んじて受けていたが、余りに罵倒されたもんだから「そんならオマエ等襲うぞ!!!」とブチ切れて叫んだらドン引きされた上に、ガードルドからも「娘達に手を出したら……わかるな?」と釘をさされたし。

まあ、いいですよ。

前いた世界でもこんなキャラだったし。

俺もそんなこと叫ばれたらドン引きするし。もし俺が親でも、同じこというし。

はあ、空が蒼いぜ……

現実逃避はここまでにして、話を戻そう。

幸いにもここは傭兵と娼婦の街だ。カザルカ

娼婦ギルドの本部も有ることから幾つもの娼館があり、娼婦の数、質ともにこの大陸最高峰である。

餅は餅屋ともいうし、この街程、娼婦探しに適した所は無いだろう。だが、だからこそ娼婦選びは慎重にならなくてはならない。

動物にとって最も無防備な状態になる時の一つに交尾が挙げられる。新たな命を創る営みが命の危機であるとは何とも皮肉な事であるが、人間の場合はそれ以上に複雑だ。

コトの最中に賊が襲い掛かってくるという可能性以外にも、閨ではやはり気が緩む。

そのせいで口も緩みふとした弾みで情報を漏らす事も有り得なくはない。

そして、もし相手の娼婦が俺達に害意を持つ連中と繋がっていたら？

想像するのは難しくないだろう。

もしそういった連中と繋がっていなくても人の口に戸は立てられない。

閨での暗殺や情報収集は古くからある手段の一つだ。

性欲という三大欲求に根差している分、単純で露見しやすくもあるが、男には兎にも角にも効果的で軀一つでコトを行う事も出来るので金も人件費だけで済み、実行犯が行方を眩ませば主犯を突き止める事が格段に難しくなる。

しかも、娼婦は接客業であり嫌がおうでも人との繋がりが出来てしまおう。

うーん、となると初めて娼婦として床を取る女を選ぶか……少なくとも客慣れした娼婦よりは情報漏洩や暗殺の危険は少なくなる。

まあ、プロのお姉さんのテクニックを味わえないのは残念な所だが……ん？

何だ、あの人だけか？

オマケにその中に見知った後ろ姿が……

「おい、ヨシユア。オマエ等こんなトコロで何やってんだ？」

「あつ、ミスタ・タケマサ！いやこれは……その……」

何かバツが悪そうだ。

一緒にいる少年達も視線を合わそうとしない。

一体どうした？

俺は視線を上に向けた。

「ははあくそういう事か、このマセガキ共め」

そう、そこは初めて床を取る娼婦の初夜権の競りを行う、いわばオークション会場だった。

「いつ、いえミスタ・タケマサ、これは……そう、人だけりが出来ていたから何かと思って……」

苦しい言い分けた。

まあ、思春期という性に興味アリアリな頃だから仕方が無かろう。

逆に興味ない方がどうかしている。

何ともまあ微笑ましい。

狼狽するヨシユア達。

「……ヨシユア、オマエ等三人か？」

「へ？はい、そうですけど……」

「よし、じゃあ行くぞ」

「行くって……」

「この中に決まっているだろう。何、入場料は俺が出す。心配すんな」

その言葉にガキ共の表情が変わった。

そして三人で小声で話し合つと、結論が出たのか俺のほうを向いた。

「ミスタ・タケマサ、お世話になります!!」

ククツ、青臭いこつた。

そんな事を思いながら、俺はヨシユア達を引き連れて会場の中に入つていった。

11・新たな懸念（後書き）

今度の投稿では出来たら番外と同時に投稿したいと思います。
・・・時間あるかな？

12・競り（前書き）

前話のあとがきで『番外と同時に投稿したいと思います』と申し上げましたが、時間や話の都合上、次話投稿以降の投稿とさせて頂き
ます。

少しでも期待を持たれていた皆様、申し訳ありません。

その上、今回はアホ回なのかどうかも怪しい中途半端な状況。
皆さん、ポイしないで下さい。

12・競り

「何だい、今日は一人だけか？」

今日、その処女を競りにかける人数を聞くなり俺は若干不満げに案内役に声をかける。

「はい、確かに本日は一人でございます。ですがお客様は非常に運がよろしい」

「どゆこと？」

彼の言いたいことがイマイチ分からない。

選択の自由が無くて、何故に運がいいのだろうか？

「何せ、本日競りに操を賭けられる娼婦というのが娼婦ギルド総括サーシャ・ハドリアヌス様の娘、アリエラ・ハドリアヌス様だからです」

「ギルド総括の娘？いくら娘の御目見えとはいえ一人じゃあ、」

割りに合わないんじゃないか、と言おうとしたのを案内役が遮る。

「とんでもない、アリエラ様は当娼婦ギルド始まって以来最高の美妓とまで言われるお方。美しい顔立ちと豊満な肢体は言葉では言い表せません！もし生まれが高貴な方であったのならばきっと傾国の美女として歴史に名を刻む程でしょう！！」

いやアンタ、顔近いし鼻息荒いから。

唾も飛んでるし。

しかし随分持ち上げるなあ……

まあ、そこまで言うのなら確かかもしれない。

その証拠か、俺達の周り席にいかにもという感じな身なりの良い男達が座っている。

これからの競りが待遠しいのか、揃って落ち着きがない。

「ミツ、ミスタ・タケマサ、傾国の美女ってどのくらい綺麗なんでしょうね?」

かくいうマセガキ共も緊張と興奮からか、若干前屈みな状態で椅子に座っている。

まあ、童貞らしいし仕方ないか。

これから来るであろう美妓を待ながら俺は彼等と適当な雑談を交わす。

「紳士の皆様お待たせしました。本日、初夜を競りに掛けるアリエラ・ハドリアヌスの登場でございます」

その言葉と共にカーテンが開き、奥から人影が現れた。

ざわめく会場。

あの娼婦が男達を性的に狂わす魔術特性を持つ『淫惑の巫女』だっ
て？

おいおい、何でそんな危険人物がこんなトコに出てるんだ？

・・・突然変異で生まれちゃったって・・・ご都合主義にも限
度があんぞ？

まあ、それは置いておいたとして・・・随分と厄介なヤツが出てき
た。

恐らく誰が彼女の初夜権を落札しても、その後の彼女の身請けを巡
って激しい争奪戦が展開されるのは確実だろう。

神の情報曰く、帝国による統一以前にも『淫惑の巫女』を巡る争い
があつたらしい。

その時は一人の女を巡り殆どの諸侯が争いに参加した為に大陸は荒
廃し、帝国が台頭する切欠にもなったそうなの。

その時みたいに貴族同士の争いや、最悪の場合は北方自由都市群へ
の侵攻という事態も考えられなくはない。

何とかしなければ俺のプランにも悪影響が出かねない。

一体どうしたものか・・・？

何だ神？

・・・・・・・・・・・・・・・・こいつぁ、買いだな。

何としても手に入れなければならない。

「さあ、それでは競りを開始させて頂きます。最初は金貨五枚から始めさせて頂きます。」

金貨五枚。

金貨一枚が10万円相当だから約50万円。

娼婦の初夜権の値段としては破格だ。

辺りからどよめき上がる。

そんな中俺は自分に宛がわれた75番の札を上げる。

「はい、75番の方！お幾らでしょう!？」

司会が俺を見て問いかける。

俺は一呼吸置き、口を開いた。

「金貨千枚」

12・競り（後書き）

次話はおそらく、今まで以上に短くなると思います。

その代わり、番外で挽回……出来ればいいんですけどねえー

（涙）

13・欲情（前書き）

遅れましてが投稿します。

最初に断らせていただきますが、凄く短いです。

まあ、今回は番外のために書いたような回ですのでお見苦しい所も多々ございますが、どうかご容赦を。

13・欲情

「何とまあ豪華な」

それが部屋に入った時の率直な感想だ。

高そうな革張りのソファ、凝った装飾が掘られたテーブル、その上に置かれた高そうな酒瓶とフルーツの盛り合わせ、大理石張りの床や壁、裸身の女を模っている柱、部屋の角の方にあるお湯の出る獅子の噴水付きの浴槽と挙げていったらキリがない。

だが、やはり一番目を惹くのは部屋の中央に鎮座する寝台であろう。

所謂キングサイズで金銀宝石による装飾や天蓋を擁し、レースのカーテンが内側と外側を区切っている。

もう暫くしたら俺はこの内側でアリエラ・ハドリアヌスとまぐわっている事だろう。

結局、さっきの競りは俺が金貨千枚でアリエラの処女を落札したことに相成った。

最初は若造の戯言と回りの中年共がヤジを飛ばしたが、机に金貨を出すすと誰もヤジを飛ばさなくなった。

司会も俺に支払い能力が有ることを確認できたらしいが、桁外れの金額をいきなり出されても相場が混乱するので困るらしく、彼女の身請け金を含めて、という事で無理矢理話を通した。

正直、かなり強引だったがここで手に入れなければ今度の機会がいつ訪れるかわからない。

そう、世の中早い者勝ち。

やらなくて後悔するよりやって後悔しろ。

俺が今まで行きた23年の人生で得た教訓。

そんなことを反芻していると、扉が開き一人の女が入ってきた。

アリエラ・ハドリアヌスである。

身長はフィーナと同じぐらいだか肉付が良く、たわわに実った乳房と桃のごとき臀部をはじめとするふくよかな肢体と、おっとりとした印象を持つ顔立ちが印象的で、桃色のストレートヘアをシニヨンで纏めている。

それとレースのローブから透けて見える裸身が俺の性欲を刺激する。

神補正よる耐性を持つ俺でさえこの有り様だ。

普通の男なら今頃押し倒している所だろう。

アリエラは床にひざまづく、日本で言うところの三つ指をし、口を開いた。

「アリエラ・ハドリアヌスでございます。この度は初夜、並びに身請けをしていただき恭悦至極でございます。どうかこれから、末永く可愛がって下さいませ」

心なしか体が震えている様だ。

無理もない。

初めて会う相手に自身のこれからの人生を買われたのだ。

自身に人生の選択肢が無いほど退屈で恐ろしい事も無い。

彼女は恐らく『自由』という言葉と最も程遠い生活を送ることになるだろうと考えているのだろう。

俺はそんな事を思いながら彼女の顎に手を添え、自身の唇を彼女の重ねた。

自身が彼女を所有するという意味合いを持つ軽い口づけ。

アリエラもいきなりされるとは思っていなかったのか少し面を喰らった表情だ。

「有坂厳正だ。君には妻が子を身籠っている間の性欲の処理をして貰いたい」

「……はい、伺っております」

大体の事情は紙に書いて競りの開催者から彼女に渡して貰ってある。

まあ、書面に書かなかった重要な秘密は追々話すとして、早速相手をして貰おうとするか。

神補正のお陰で幾らか耐性が有るとはいえ、『淫惑の巫女』である彼女のオーラを当てられてしまったせいも、俺自身もう既に臨戦態勢である。

一刻も早く彼女の軀を喰りたい。

そんな劣情を抑えながら、俺は部屋の角の浴槽へと足を向けた。

13・欲情（後書き）

次回はもうちょっと長く書けると思います。
あまり過度なご期待はせずにお待ち下さい。

14・阿修羅の如く(前書き)

毎度お馴染み、アホ回です。

注意書きをご覧の上、正しくお読み下さい。

14・阿修羅の如く

アリエラとの一夜を経て宿屋に帰るとそこには……阿修羅が
いましたら。

……訂正。

阿修羅の如き表情で仁王立ちする我が愛する嫁、フィーナさんがお
られました。

何でも断り無くアリエラを身請けしたのがフィーナの逆鱗に触れた
らしく俺は彼女の前で正座をした状態。

処断の時が何時かと戦々恐々しているところ。

いやぁー、ヨシユア達にはちゃんと伝える様に頼んだんだけどなぁ
・

ハハハ、やっぱり直接説得した方が良かったかなあ……

「タケマサ」

そのフィーナの呼び掛けに俺は顔を上げる。

そこに要るのは微笑みの表情を浮かべる愛する妻の姿。

でも……でもね……
……目が笑
つてないんですよ。

人間、怒りが臨界を越えると逆に冷静になるって言う奴もいるけど、本当だったんスね。

「タケマサ、あたしさつきまで本当に気分が良かったの。心から愛するアンタとの子供をようやくと身籠れて本当に嬉しかったわ」

淡々と言葉を紡ぐフィーナ。

文章が過去形だったのに胃がキリキリする思いだ。

「確かにアンタの決断はアタシや子供の事を気遣ってって事は百も承知よ」

はい、それは説明させて頂きました。

「でもね……タケマサ」

やべっ、何か黒いオーラみたいなものが出てきた。

「アタシに、断りも無く、娼婦身請けするって……どーゆー事じゃあ、ゴルアツツ!？」

はい、大噴火。

そんなフィーナさんを見て辺りにいたガードルド・チルドレン達は一ヶ所を集まってガクブル状態。

ミス・クラックスは恐怖の余りにリアレスの背後に隠れてしまっているし、リアレスも「出来るな」とか言いながら感心している。

何というカオス。

「やっぱり男は胸なの！？そう、胸なのね！？だからあんなお胸様を身請けしたんでしょ！？何！？何よ！？どこのどいつよ！？」おっぱいの、おっぱいによる、おっぱいのためのおっぱい』とかほざいたら奴はああ！！！！？」

フィーナ様御乱心。

リンカンが聞いたら激怒しそうな、そしてどっかの球体形状の自称鷹が言う様な台詞を吐きながら、俺の胸ぐらを掴み前後に激しく揺らす。

「ちょっと、フィーナ落ち着け！」

「どの口が言うがぁ、ゴルァ！！！」

ああ、もう！

公衆の面前だが致し方あるまい！！！！

「！！むっう　　！！！！」

強引にフィーナの唇を奪い、舌をねじ込む。

それと同時に彼女の胸を揉み砕いた。

「　　ぶはぁ、タケマサイきなり何を　　ひゃあッ！！！！
ちよっと、みんなの前でそんなトコロに、ゆっ、指挿れちゃ、らっ、

あるが彼女の胸が大きくなってきていたと薄々思っていた。

それにあと七ヶ月もすれば子供も生まれ、その乳房からは母乳も出るようになる。

そう、フィーナはまだ胸が大きくなる可能性を大いに秘めていると
いうことだ。

「第一、お前、まだ十七だろ？そんな若いうちから自分を悲観して
どうするんだ？」

自分の軀を悲観してだが。

「それにそんなに大きな胸が欲しいなら……」

俺はフィーナの耳元に口を近づけ呟く。

「俺が目一杯、可愛がって育てて、大きくしてやんよ」

その言葉にフィーナはまるで林檎の様に顔を真っ赤に染めて「うん」
と頷いた。

よし、タイミングはここだな。

「フィーナ、彼女が今回身請けしたアリエラ・ハドリアヌスだ。い
ろいろと拙い所もあるが色々教えてやってくれ」

そう言うと俺はアリエラに自己紹介を促す。

「アリエラ・ハドリアヌスで御座います。不束者ですが、正妻のフ

イーナ姉様にご迷惑を掛ける事の無いように精一杯やらせて頂きますので、どうかよろしくお願い申し上げます」

さすが、最高級の娼婦になる為の教育を受けただけあってその対応には気品があった。

フィーナはアリエラの顔を覗き込む。

そして人定めが済んだのか、少し表情を緩め「フィーナ・ネルヴァよ。よろしく頼むわね」と言った。

そこからは女同士。

お互いの自己紹介とも、腹の探り合いとも取れるとりとめの無い会話が続く。

ふう、取り敢えず第一段階はクリアしたみたいだ。

正直、修羅場に慣れていない俺にとっては胃が螺切れそうなる思いだったよ。

……まあ修羅場に慣れたくも無いが。

そんな事を考えながら、ふと、フィーナとアリエラの会話に耳を傾けた。

「アリエラ、さっきから姉様姉様って言うけど何で姉様なわけ？」

「はい、年上の尊敬する女性の方を姉様と呼ぶのが娼婦（私たち）

14・阿修羅の如く(後書き)

厳正さん、天然の年下喰いだつた事が発覚!!
.....まあ、どうでも良い事ですが。

15・冷たい雨の降る中で（前書き）

遅れました。

申し訳ありません。

おまけに力押し of 展開。

何とかせねば。

15・冷たい雨の降る中で

決して衛生的とは言えない裏路地は硝煙と血の臭いで満たされた。

だがそこにある遺体の全てが銃撃により死亡したというわけではなく、斬撃や刺突により命を刈り取られた遺体も多数見受けられる。

俺は空になったマガズインを取り替えながら周囲を見渡す。

一ヶ所に集まり咽び泣くガードルードチルドレンズ。

それを慰めるミス・クラックスとアリエラ。

沈痛の面持ちのガードルード。

周囲への警戒を解かないリアレス。

そして……

「タケマタ……」

右手にP90を持ちながら俺に問いかける様な視線を送るフィーナがいた。

自身の甘さを噛み締めながら俺は天を仰ぐ。

その顔には降りだした雨が容赦無く降り注いでいた。

話は俺がフィーナに血祭りにされかかっていたところまで遡る。

俺はその時のフィーナによる制裁を彼女、ミス・クラックスが止めるとは予想だにしなかった。

その表情には焦りの色が見受けられ、フィーナもその表情を見るなりハッと何かを思い出したかの様に表情を変えた。

そしてミス・クラックスの口から出た言葉に俺は驚愕する。

それはガードルードがロガー・オドアケル殺害容疑でコルスカツツエ・ファミリーにて事情聴取を受けているというものだったからだ。何でも傭兵ギルドからの取り調べを名指しされたらしく、かなりの力押しにコルスカツツエ・ファミリーも無下には出来なかったようだ。

はつきり言っ て先手を打たれたとしか言いようがない。

俺は苦虫を噛み潰した様な表情のまま、コルスカツツエ・ファミリーのガザルガ支部に向かった。

「全く、大勢で押し掛けるならアポイントメントを取って置いて欲しいものですね」

ロッケンは俺達全員が押し掛けた事に苦笑いしながらも、あっさり とガードルードを釈放してくれた。

「私達も確固とした証拠がない人間を逮捕するほど馬鹿ではありま

せん」

今回の事情聴取も傭兵ギルドからの強い要望により、仕方なく、やったものだという。

コルスカツエ・ファミリーの中立的立場が明確になっただけでも良しとしよう。

そう思いながら、ガードルードを先頭に行く一団の最後方を歩いていた。

それがいけなかった。

ぞろぞろ続いていた行列が止まり裏路地の横道から顔を布で隠して傭兵風情の男達が30人程出てきた。

迂闊としか言いようがない。

俺はすかさずSG550を構え、5・56mm弾で弾幕を張った。

フィーナもP90を使い応戦し、お互いのマグチェンジをカバーしながら瞬く間に傭兵達を殲滅していく。

最早、阿吽の呼吸と言っても過言ではないだろう。

後方の敵の排除が終わり、前方へと視線を移した。

前方の敵の排除も粗方完了したのか動いている敵の姿は見えない。

しかし倒れている者の中には傭兵ではない者も見受けられた。

その側に立つガードルードの表情は固い。

「ガードルード……何人殺られた？」

「……三人だ。それと重傷者が一人……」

「重傷者は？」

「……ケイティだ」

俺は内心で自分の不甲斐なさに毒づくと、直ぐ様ケイティの元へと向かった。

「容態は？」

彼女を介抱するミス・クラックスに話しかける。

「……あっ……その……」

「どうした？はっきり言え！」

「……腸が、飛び出しています……だから……」

寝そべるケイティに目を向けた。

土色の顔に珠の様な汗を浮かべ、息も荒い。

そして彼女の腹部にかけられたブーケが紅く染まっていた。

「ミス・タケマサ！貴方なら助けられますよね？」

ヨシユアが涙ながらに俺に助けを求める。

だが俺は押し黙ったままだ。

「ミス・リアレス？」

今度はリアレスに助けを求める。

「……ヨシユア、私も回復魔法の初歩なら使えるが……ここま
でだと……」

リアレスも言葉を詰まらせる。

「そんな……」

ヨシユアの顔が絶望に染まった。

「……大丈夫だ、今楽にしてやる」

そう言うと俺はSG550のドットサイトの光点をケイティの頭に
合わせた。

「……！ミス・タケマサ！アンタ何やってんだ！！！」

ヨシユアがSG550の先を掴む。

「……もうこうなったらどうしようも無い。俺達に出来る事

と言ったらさっさと楽にしてやる位しか……」

「アンタ、何も無いところから武器とか出せるんだろ？ だったら……」

「生憎、俺は万能じゃあ無い」

俺の一言にヨシユアが押し黙る。

「じゃあ、せめて一緒に連れてく位は……」

「それも駄目だ」

「……！！何で……」

「足手まといだ」

その一言にヨシユアが激昂する。

「足手まといだと……アンタ人の命を何だと思ってるんだッ
！……」

「……恐らく敵方は後詰め部隊を用意している可能性が高い。連れて行くにはリスクが高すぎる」

「だったら、どこかに隠して後で……」

「いや、時間が無い」

楽観論を述べようとしたヨシユアの言葉を俺は封殺する。

「だったら何で、ここでケイティを・・・!?!」

「ヨシユア、」

突如リアレスが口を挟んだ。

「聖乙女騎士の必修魔法で『浄化の蒼炎』というのがある。これなら遺体を骨まで残さず燃やし尽くすことも可能だ」

「・・・なんでミス・リアレスがそんな魔法持っているんですか!?!」

今度はヨシユアがリアレスに食って掛かる。

「・・・戦場において女っていうのは、虜囚になれば辱められると相場が決まっています、例えそれが遺体でも例外ではない。

死んだ仲間の亡骸が汚されるのを是としない為に必修とされている」

戦場という異常な空間で人は様々なストレスを受け、それが容量を越えると様々な形で発散しようとする。

捕虜に対する虐待や虐殺。

占領地域からの略奪。

そして女達への凌辱。

時にその凌辱は亡骸となった女達にも行われ、死してなおその軀を汚され続けるのは忍びないという観点から聖乙女騎士団では必修

にされているだろう。

「だからって……」

ヨシユアは言葉に詰まる。

「ヨシユア、ここはタケマサことを聞いておけ」

ガードルードも俺の意見に追随した。

「親父……」

ヨシユアにとってこれは効いたようだ。

そしてガードルードを睨みつける。

「ヨシユア、とつとと退け。じゃあ無いと狙いが付けられねえ」

「だけど……」

なおもヨシユアは煮え切らない。

「じゃあ、お前はケイティに死ぬまで地獄の苦しみを味わえっついでうのか？随分と酷な事を言うもんだな」

俺はヨシユアに皮肉をぶつける。

「それにこのままウダウダやってると全員の命が危ないんだよ」

「……ミスタ・タケマサ！俺はアンタがこんな……」

「ああ、どうしょうもないクソツタレだよ、俺は」

その言葉に憎しみに満ちていたヨシユアの表情が呆気に取られたものに変わっていく。

「だがな、そんなクソツタレな俺でもフィーナやアリエラ、そしてフィーナの腹ん中のガキを護らなきゃあならねえんだ。その為にはお前達をこんなトコロでくたばらせる訳にはいかないんだ！」

結局は自分の都合。

自分の都合に彼らを巻き込ませているだけだ。

でも、ちっばけな俺にはこんなやり方でしか新しく出来る『家族』を守り通す自信がない。

所詮は人の子。

万能ではない。

「ヨシユア……つく……」

「ケイティ!？」

瀕死の状態のケイティがヨシユアを呼んだ。

「お願い、……楽にして……」

その言葉にヨシユアは絶句する。

恐らく俺とヨシユアの押し問答を見かねて言った事だろう。

俺は彼女に「許せ、なんて言わない。怨んでくれて構わない」と言う
とケイティに標準を合わせる。

その時だ。

「ミスタ・タケマサ」

ヨシユアが声を上げる。

「何だ？ここまで来て……………」

「俺にやらせて下さい」

俺は些か驚いたが、成る程、と思いレッグホルスターのP226を、
セフティを外して彼に渡す。

無論、SG550はヨシユアに向けた。

銃を渡してズドンじゃ敵わないし。

「ケイティ……………大好きだよ……………」

「……………ヨシユア……………私も」

最期の言葉の途中で銃声が響く。

それは一人の少年の初恋が終わった事を示していた。

「……本当、クソツタレだ」

俺は毒づかずにはいられなかった。

蒼い炎が燃えている。

ケイティをはじめ、四人の少年少女の亡骸を焼き尽くしながら。

常人が触れても熱くなく、火傷も負わないそれはまるで冥界のものの様だ。

その炎が彼らの体を灰も残さず焼き尽くした頃には、既に俺達は力ザル力から姿を消していた。

15・冷たい雨の降る中で（後書き）

いきなりの超展開。

分かりにくい展開でしたが、しばらくはこんなのが続きます。

おまけに更新速度も、おそらく、落ちます。

どうか見捨てないで下さい。

16・ニイタカヤマノボレ（前書き）

キンクリ。

超展開。

わかり難いの三重苦。

文章を書くって本当に難しいです。

しばらくは時間軸が行ったり来たりします。

本当に分かり難いのであしからず。

『だったらもつと編集しつかりしろよ』とか言わないで下さい。

……立ち直れなくなるので（涙）

16・ニイタカヤマノボレ

「ふっ……あぁー……」

「おい、欠伸なんかするなよ。上に見つかったらどやされるぞ?」

「平気だつて。第一、今ココを襲うバカが何処に居るんだよ?」

そう言いながら欠伸をした男は、視線を自分の後ろの建物に向けた。

カザルカの北部の中心に位置する五階建てのコの字型の洋館。

傭兵ギルドの本部である。

南部の中心にある娼婦ギルドの本部とは対極に位置しており、陰陽魚対極図の陰中の陽と陽中の陰の様な位置関係とえば理解しやすいだろう。

ともかく、娼婦ギルド本部である『淫婦の褥』と共に、この洋館『戦士の館』はカザルカの二大ランドマークと言っても過言ではない。

そのランドマークの一つが、今は訳有って非常に物々しい警戒体勢がとられている。

かく言うこの二人も正面門の警備を言い渡され、その任に就いていた。

「第一、ロガー様が殺されてからもう四ヶ月だぜ?連中も今更戻つてはこないだろうし、もう北方自由都市群ホウポウジユウトシグンから尻尾巻いて逃げてる

つて」

「だけどなあ・・・」

「それより、今日仕事終わったらこの後一緒にどうだよ？たまには奮発して生娘でも買いに」

行こうぜ、という言葉がが、相棒から出てこなかった。

彼の相棒は表情をそのままにゆっくりと倒れていく。

「おい、ど」

彼の口から続き言葉が出ない。

それもその筈、彼の言語中枢は亜音速で発射された9mm×39弾での確に決り取られ、脳髄もろとも破壊されていた。

『こんな事なら、さっさとあの娘を身請けしておけば良かった』

死に逝く時の最後の思考。

彼はいずれ身請けをし、所帯を持つと約束した馴染みの娼婦の肢体の温もりを思い出す。

そのまま薄れ行く意識の中で最期に感じたのは、コッゴツした冷たい石畳の感触であった。

.....

『正面の敵、排除成功』

「了解。門扉より突入を開始。位置に付き次第、正面玄関並びに中央ホールの制圧に取り掛かれ」

『了解。これより攻撃に移る、終わり』

黒い格好の4人組が『戦士の館』正面の門扉の前に現れた。

そして周囲を警戒しながら手信号を送り、仲間に合図を送る。

すると、周囲から先行の4人と同じく黒の戦闘装備にバラクラバという格好の連中と、同じ黒の戦闘装備に身を包んでいるがバラクラバを被っていない者たち3人、合わせて20人前後が出てきた。

そしてその内の二人が前に出、大きな筒状のモノを肩に担ぐ。

カールグスタフ

日本の自衛隊では84mm無反動砲と呼ばれている軽量火砲だ。

開発から60年以上たっているが、いまだに使用する国は多い名器である。

砲手の二人はそれぞれの砲口の照準を正面玄関の扉に合わせると、迷うことなく引鉄を引いた。

耳を劈く炸裂音が辺りに響き渡り、空気を揺らす。

そして露払いとばかりにPKMを持った機関銃手が、異変に気付き無防備にも正面玄関から出てきた敵兵を排除していく。

そして再びカールグスタフが火を噴いた。

今度の弾丸は先程扉を吹き飛ばしたHE441B榴弾ではなく1100本の鉄製の矢が入ったADM401フレシエツト散弾。

それを玄関ロビー目掛けて撃ち込んだ。

総数2200本の矢が撃ち込まれたそこは、まるで地獄にあるという針山の様なありさまで、おそらくこの距離では生き残っている者はいないだろう。

そんな事を思いながら無線で指示を送る。

「各員、中央ホールに制圧射撃を開始。制圧射撃完了後、陣地形成を開始せよ。終わり」

『了解』

その言葉を聞くなり、各員が弾丸を玄関ホールに叩き込む。

そして抵抗が無いことを確認すると、玄関ロビーから中央ホールに侵入し陣地形成を開始する。

「HQ、こちらアルファー、送れ」

『こちらHQ。どうしたの?』

「これよりブラヴオーはアルファアの指揮下より離れ陣地の形成を開始。形成後はその防衛に当たる。並びにチャーリー、デルタに『ニイタカヤマノボレ』。繰り返す『ニイタカヤマノボレ』」

『ブラヴオー陣地形成に移行。チャーリー、デルタに『ニイタカヤマノボレ』、了解』

「なお、アルファアは状況を『ト・ト・ト』に移行する」

『アルファア、状況『ト・ト・ト』、了解』

HQへの報告を終え、次の行動を指示しようとした時だ。

『ねえ・・・』

HQから再び通信が送られてきた。

声は同じであるが、先程の事務的な報告とは違い明らかに感情が込められている。

「・・・HQ、どうした？」

『・・・タケマサ・・・本当に無事に帰って来れるよね？』

公私混同甚だしいその無線を咎めようと思ったが、彼女の気持ちを察し、ココは軽口で答える。

「大丈夫。ガキの顔見るまで死ねるかよ。それにお前の躯、堪能し尽くさないし」

突入部隊の中でバラクラバを被っていない三人うちの一人、有坂巖正は無線機の向こうにいる妻、フィーナの問いかけに答える。

「・・・・・・・・バカ、スケベ」

「褒め言葉どうも、終わり」

妻との交信を終え、巖正は階段の上を見た。

そしてそこを見つめ号令を発する。

「オールアルファー、これより進攻を開始する」

16・ニイタカヤマノボレ（後書き）

初の三人称・・・っぽい文でした。

無線の交信は陸上自衛隊のやり方っぽくしています。

・・・ちゃんと出来てはいませんが。

こんな私ですが、見捨てないで下さい。

17・Negotiation Part 1 (前書き)

さあ、始まってしまった超展開祭り。
そしてまたまた時間軸が前後します。

.....自分の文才の無さが恨めしい

o r z

17・Negotiation Part 1

「早速だけど、札付きのアンタらが危険を犯してまでココに来た理由を聞かせてもらおうかい？」

そう言うと彼女、サーシャ・ハドリアヌスは俺たちに値踏みするような視線を向けた。

サーシャ・ハドリアヌス。

俺の第二夫人アリエラの母で、娼婦ギルド総括を勤めている。

元々は女傭兵であったが、戦場で男たちの性欲発散の手段が慢性的に不足するのを見て、女傭兵達を纏め上げ、その軀を用いて男たち相手に商売を始め、娼婦ギルドの元を立ち上げた女傑だ。

その為、中々の武闘派で北方自由都市群の中でも右派に属している。

おそらく同席しているアリエラの口添えが無かったらこの娼婦ギルド本館“淫婦の褥”には入れなかったし、彼女にも会えなかっただろう。

カザルカから逃亡して二ヶ月、手持ちの戦力の目処が付き俺は次の段階へと状況を進める決意をした。

そう、『困い』を作ることである。

いくら俺たちが近代兵器を駆使しようが、圧倒的な数の暴力に対して、力任せでは勝ち目は無い。

そこで思いついたこと、それが……

「アタシ達、娼婦ギルドにアンタ等の手助けをしるって事かい？」

「そうです、ミス・サーシャ。理解が早くて助かります」

俺のその言葉にミス・サーシャは明らかに怪訝な視線を俺に向けた。

「アンタ、自分が一体何を言っているか分かっているのか？アタシ達と一緒に心中しろって言うのかい？」

口調はさっきのもの比べると明らかに強くなっている。

現在の俺たちの状況を考えれば最もな意見だろう。

ロガー・オドアケル殺害の最有力の容疑者と、その一味。

そして傭兵ギルドに弓を引き、北方自由都市群に秩序を乱す者たち。

そんな者たちに好き好んで手を貸す者は狂人の類しかいないだろう。

「まず、はじめに言っておきます。我々はロガー・オドアケル殺害に一切関与しておりません」

「はぁ……下手人って言うのは、大抵最初はそう言うんだよ。自分の身可愛さに……」

「そもそも、ロガー・オドアケルは本当に殺害されたのですか？」

その言葉にサーシャの動作が止まった。

「アンタ、一体何を・・・」

「そもそも、今回の事件で最も重要なモノがありません。お気づきですか？」

「・・・・・・・・・・・？」

「ロガー・オドアケルの遺体です」

俺はそのまま話を続ける。

「以前、コルスカツエ・ファミリーに赴いた際に聞いたのですが、担当の者がロガーの遺体は搜索中だと言っていましたね、今も遺体は発見されていないようです」

「でもね、死体が無いからって生きているって」

事にはならないんじゃないか、とミス・サーシャが次の句を紡ぐより早く俺は口を開く。

「いいえ、それだけではありません。若干話はずれますが、シンダールの行動に奇妙な点があるのも我々が無実であることを物語っています」

「奇妙な点？」

「はい、ロガーが行っていた諸改革の廃止です」

ロガーが変心する前、彼は傭兵ギルドの改革に乗り出していた。

それは跡継ぎとしての地盤固めの為と言えるが、縁故人事の排除や武勲だけで成り上がり戦術を知らない指揮官の解任、兵士の規律を向上するための教育制度の導入など、ただの傭兵団の集りに過ぎなかった傭兵ギルドを何らかの明確なヴィジョンを持って変えようとしていた痕跡が多々見受けられる。

中でも目玉となったのはギルド長直属部隊、『矛の旅団』と『盾の旅団』の創設である。

ロガーは父の側近をそれぞれの旅団長に任命し彼らに各傭兵団の統率を任せようと計画していたようだ。

元々、シンダールの人身掌握術によって纏まっていたのが傭兵ギルドの実態で、彼の死後の分裂が懸念材料となっている。

傭兵ギルドの分裂、つまり北方自由都市群の防衛力の弱体化だ。

これは帝国の北方自由都市群に対する影響力が強まることを意味している。

事実上の自治を認められている北方自由都市群であるが、帝国からの圧力が無いわけではなく奴隷売買や売春事業という金のなる木から税を取りたいというのが彼らの本音であろう。

この事によりロガーが傭兵ギルドの後継争いというミクロ的な観点からだけでは無く、北方自由都市群の自治の維持というマクロ的な観点からも改革を行っていたことが伺える。

それらの改革をシンダールはロガーが死んだとされる後に次々と廃止していき、現在は『矛の旅団』と『盾の旅団』しか残っていないかった。

「と、いうことはだ、アンタはシンダールがロガーを殺したって言うのかい？」

「はい」

「馬鹿馬鹿しい」

ミス・サーシャが吐き捨てるように言った。

「確かにシンダールとロガーの仲はあまり上手く行っていなかったさ。だからと言って、改革を廃止したからヤツが殺したって証拠にはならないだろ？」

確かにそうだ。

あくまで推測であって、彼ら親子の間で何があったかは彼らにしか分からない。

そこで俺は一枚の紙を彼女に差し出す。

「何だい？こんな紙……!?」

俺が差し出した書面を見るなりミス・サーシャの表情が驚愕に染まった。

その瞬間、俺が心の中でガッツポーズをした事は言うまでもない。

17・Negotiation Part 1 (後書き)

分かりにくいことこの上ないですね。

アリエラちゃんも空気ですし……何とかせねば。

18・ト・ト・ト・ト(前書き)

更新遅れて申しわけございません。

予想以上の難産でしたが、何とかできました。

相変わらず拙いですがよろしく願います。

あと、更新の速度が落ちるかもしれないがどうかご容赦下さい。

娼婦ギルド本館、通称『淫婦の褥』。

その最上階にある総括執務室。

机上には幾つもの軍用無線機やカザルガの地図が置かれており、さながら臨時の通信指令本部の様相をなしている。

そして部屋の中央に位置する大机、その上座にはこの事実上の指揮官であるフィーナが鎮座していた。

妊娠七ヶ月を迎える彼女はそれまで着ていたチューブトップやコルセットなどの締め付けの強い服装ではなく、黒色のマタニティードレスに身を包んでおり、更に頭には無線機のヘッドセットと何ともちぐはぐな格好である。

「チャーリーとデルタの展開は完了した、アライ？」

出来ることなら厳正と共に最前線で戦いたい彼女だが、腹の子供のことを考えるとそうともいわず、コールサイン：アルファーこと厳正との直通回線の通信を担当する事となった。

「前線で戦うタケマサと出来る限り共に有りたい」

その言葉に厳正も折れないわけにはいかなかった様だ。

「フィーナ姉様、チャーリーとデルタ、予定の位置に展開完了しました」

無線機を預かるうちの一人、厳正のもう一人の妻であるアリエラが
フィーナに新たに送られた情報を伝える。

「了解。ローラさん、エコーから連絡は？」

フィーナすぐさまエコーとの通信を担当するアリエラの実姉、ローラ・テオドリックに顔を向けた。

トランジスタグラマーなアリエラとは違い、幼い（言い換えれば口
リーな）容姿である彼女を見ると姉と妹の立場が逆なのではないか
という疑念に駆られてしまう。

だがアリエラはおるかフィーナよりも年齢は上で、既に夫との間に
一男一女を儲けており、初めての出産を控えるフィーナとしては頼
れる存在であり、彼女にとっては行方不明の姉以来の頼れる身近な
年上の女性だ。

もともと作戦行動中である現在は彼女も情報統括担当のフィーナの
指揮下に入っており、そのような私情を出来るだけ排除している。

ローラもそれを察してか、普段の猫撫で声の様なものではない。

「……………訓練の際に矯正した甲斐があったというものだ。

「未だ来ていません」

「了解。予想以上に相手方の指揮系統が混乱しているのか……………
？アルファー、こちらHQ、送れ」

『こちらアルファー、どうした？』

「チャーリー、デルタ共に展開を完了。あとエコーからの連絡は未だ無し。あっちの相手方は随分と混乱しているみたいね」

『僥倖、敵の足並みが乱れるのに越したことは無い。エコーには引き続き監視を続行させる。どうぞ』

「了解。エコーには対象が出撃したら支援に向かわせるわ。それと、そちらの制圧状況は、どうぞ？」

『二階の制圧が完了した。これより三階に移る。どうぞ』

フィーナが通信終了を厳正に告げようとしたその時だった。

「フィーナちゃん、エコーより入電。対象が『戦士の館』方面に向かって出撃しました」

エコーとの通信を担当するローラが声を上げた。

「了解。タケマサ、対象がそちらに向かったわ。どうぞ」

『了解した。さて、こっから更に気を引き締めんとなっつー！』

その言葉と共にヘッドセットから銃声が響く。

恐らく、戦闘が再開したのだろう。

「……………タケマサ」

フィーナは自身が彼の隣にいる事の出来ない状況が苛立たしくてたまらない。

しかし、自分の体が既に自分一人のものではないと必死に自分に言い聞かす。

自分と厳正との結晶。

愛という行為の結果。

彼と彼女を繋ぐ絆。

それを護り、そして産む事が彼女にとっての、今最大の責務なのだ。

(そうだ、この作戦が終わったら久しぶりに抱いてもらおう)

そんな思いが彼女の中で生まれる。

子供を身籠ったのが発覚して四ヶ月。

厳正は律儀にも一向にフィーナを抱こうとしなかった。

母体を心配してのことだろう。

だがフィーナは既に安定期に入っており、余程激しい行為でなければ問題は無い。

アリエラも含めて三人ですればフィーナにかかる負担も格段に減る。

(………迫ればアイツも拒まないよね?)

そんな事を作戦中にも関わらず考えてしまう。

「姉様、チャーリーとデルタが対象を視認したようです」

その言葉がファイナを現実へと押し戻す。

作戦は更に次の段階へと進んでいった。

.....

「これは一体どう言う事だ!!」

傭兵ギルド長直属部隊『矛の旅団』旅団長、ジャイス・アラリックは『戦士の館』正面門を封鎖する『盾の旅団』の兵士に声を荒げて詰め寄った。

「申し訳ありませんが、アラリック様といえど、此処を通すわけには参りません」

アラリックに詰め寄られた兵士は表情を変える事無く淡々と事務的に答えた。

その回答にアラリックは表所を怒りに染める

彼の背後には彼が統率する『矛の旅団』の兵士が約百人控えており、賊が侵入したという『戦士の館』に突入できるような体勢を既に整えていた。

しかし、同じギルド長直属部隊である『盾の旅団』がそれを阻むという理解不能な状況に彼は混乱する。

怒りと混乱に苛まれるアラリック。

すると眼前に居た『盾の旅団』の兵士が二人の男と一人の女に道を開けた。

その内の一人の顔をアラリックは嫌というほど知っている。

「……………テオドリック、どう言う事だ!？」

マゼル・テオドリック

もう一つの傭兵ギルド長『盾の旅団』旅団長であり、アラリックをシンダールの右腕とするならば左腕といえる人物だ。

元々は帝国軍所属の由緒ある騎士であったが、政争に巻き込まれ失脚し家族や信頼できる部下と共に北方自由都市群に逃れ、その統率力から傭兵ギルドに招かれたという経歴の持ち主である。

その為か根っからの騎士であり、補給を現地挑発しがちでその上褒美として略奪や強姦を奨励するあるアラリックとは折り合いが悪く、彼らの対立は傭兵ギルド内の懸念材料になっていた。

その彼がギルド本部を襲う賊に与している。

政敵を追い落とす材料が目の前にある。

それだけでアラリックは思わず歓喜の声を上げそうになる。

「失礼しますよ、ミスタ・アラリック」

が、隣にいた男の言葉がアラリックを現実に戻した。

「貴様は・・・コルスカツエの」

「はい、お見知りいただいて光栄です。ロツケン・シシリーです。本日はドン・コルスカツエの名代として参りました」

ドン・コルスカツエの名代？

何故、此処にドン・コルスカツエの名前が出てくるのだろうか？アラリックは分からなかった。

だが彼に考える暇を与えず三人の中で唯一の女、サーシャ・ハドリアヌスが口を開いた。

「何、今回はアタイとコルスカツエの旦那の名前が必要だね、こつちにはアタイが出て来たったわけさ」

名前が必要？

その言葉が何を意味するか、アラリックには分からない。

するとサーシャは一枚の紙を懐から取り出しアラリックの前に広げた。

アラリックはその文面を読み上げる

すると彼はその内容を見るなり愕然とした。

シンダール・オドアケル

この者を北方自由都市群に対する背信があつたとし、傭兵ギルド長の職を剥奪する。

更に財産没収の上、北方自由都市群からの追放も申し付ける。

なお追放は生死を問わない。

パオット・コルスカツエ

サーシャ・ハドリアヌス

18・ト・ト・ト(後書き)

因みに、『アリイ』はアリエラの愛称です。
相変わらず分かりにくい上、超展開でスイマセン。

19・Negotiation Part 2 (前書き)

一ヶ月ぶりの投稿になります。

無事生きてます。

そして大難産でした。

あー、知識や文章のボキャブラリーがもっと欲しい(涙)

そして時間も欲しい(涙)

拙いですがいじめないで下さいorz

19・Negotiation Part 2

「……仔細はわかった」

そう言うと厳正の正面の古老、パーオット・コルスカツツエは手に持った証書をため息混じりにテーブルに置く。

「理解が早くて助かります、ドン・コルスカツツエ」

北方自由都市群最大にして唯一の侠客組織であるコルスカツツエ・ファミリーを僅か一代で築き上げ北方自由都市群の樹立にも尽力した男は、嘗ての盟友の裏切りを確認し、まぶたを閉じ呟いた。

「あ奴め、わしより先に老い痴れおって」

その顔に悲愴な面持ちが浮かぶ。

厳正はその言葉を聞き、先程コルスカツツエがテーブルに置いた証書に目を落とした。

その内容、それは帝国の北方自由都市群の介入を手助けする代わりに、シンダールに爵位を与えろという宰相補佐官との密約を記したものだ。

かつて帝国は、聖教が定める『卑しい仕事』という嫌悪感から傭兵、娼婦、侠客、奴隷商人、学士の五つの職業を『穢れた者たち』として北方の地に閉じ込めた。

しかし売春業を統括する娼婦ギルド、そして奴隷の売買を一手に請

け負う奴隷商会組合などの『金の成る木』を国内から排除したことにより帝国に問題が発生した。

税収の低下、一部の市場の移動、そして富の流出である。

嘗ては帝国内の都市ならばどこにも艶街や奴隷市場が存在し物が物語るように、この二つの産業は帝国全土に巨大な市場を持ち、莫大な利益を上げておりその中から支払われる税収も相当なものであった。

だが、それを北方に押し込めたことによりそれまで彼ら『穢れた者たち』が支払っていた税収が無くなり、帝国の財政が悪化し始める。

また、これらの職業が北方に移動した事に伴い、傭兵を顧客とした武器職人や武器商人。

娼婦が着る服を仕立てる職人。

娼婦を買いに来た者を客とする金貸し。

その客が使う居酒屋や宿屋。

共に北方へ移っていった者たちを数えだしたらキリが無い。

更には娼婦を抱きに、奴隷を買いに、傭兵を雇いに来た客たちが金を落としていく。

当然その中には多くの貴族も含まれており、彼らの資産の多くが娼婦と奴隷をかうために消えていった。

流失していく貴族の資産、そして増大する北方自由都市群の経済力。

遅かれ早かれ帝国が北方自由都市群に介入するのは必然であったといえよう。

「しかし、シンダールを抱き込むとは……」

コルスカツツエが呟く。

「確かに、予想し難い事ではありますが冷静に考えれば有り得ない事では有りません。恐らくシンダールも、自身の老い先が短いと思ひ若い息子に何か残したかったのでしょう……兄である口ガ」を切り捨てても」

その言葉にコルスカツツエが不愉快な表情をした。

彼とて人の親である。

子供達のことを人並みに愛して入るし、その幸せも願っている。

だが、その為に他の子供を犠牲にするとは思ひも着かない。

シンダールのやった事は正に鬼畜の所業であるとコルスカツツエは思った。

(何故、この様に変節した?)

盟友の変わりように、彼の心と表情が悲しみに染まる。

「それともう一人の裏切り者をどうするかも考えなくてはいけませんね」

その表情を見た厳正はすかさず話題を変えた。

「確かにな。まあ、ヤツの家の事を考えれば得心するが……」

コルスカツエは証書に書かれたもう一人の名前に視線を向ける。

グラスコ・ガラバ・メデイチ

皇帝に側室を送る程に帝国中央との繋がりを持つメデイチ家の末席に名を連ねる者。

現在の奴隷商会組合の組合長を勤める男でもある。

「メデイチが絡んでいるとなると殊更厄介だぞ？」

メデイチ家は帝国最大の政商である事もありその影響力は巨大なものである。

皇帝ですらその扱いにある程度の気を使う一族の者を排除するという事が、並々なら事なのは言うに及ばない。

今回、シンダールと宰相補佐官の間を取り持ったのも、恐らくは彼であろう。

長い間ファミリーを取り仕切ってきたコルスカツエはその厄介さを嫌というほど理解していた。

だが次に厳正の口から出た言葉にコルスカツエは表情を変える。

「いえ、今のタイミングならばメデイチも迂闊には手を出せません」

「一体何故だ？」

「ドンは帝国の財界で動きがあつたのはご存知ですね？」

「ああ、フツガー家が帝国軍工廠へ卸す鉄の御用達になつたとか……」

「はい、それまでは帝国の御用達はメデイチ家やそれに与する者達の独壇場でした。ですが今回、帝国軍への取引という大口を奪われた事に彼らは相当な危機感を抱いているようです」

「それへの対応でこちらに構っている暇は無い……と？」

「はい。また、それだけではありません。連中も中々の情報網を持っているようですが帝都にそれが届くにはそれなりに時間がかかります。それに……」

「間もなく来る冬が更にそれを遅らせる、か？」

「その通りです、ドン」

だがコルスカツツエの眉間から皺は消えない。

「それまでにこちらの体制を磐石にする、か……」

そして目を瞑り、

「一つ聞きたい、貴様は何でこの様なことをしようとする？ シンダ

「ル側の襲撃を受けてなお、北方自由都市群に残ろうとする理由は
何だ？」

巖正に問いかけた。

そして巖正も口を開く。

彼等がカザルカから姿を消して三ヶ月。

そして、『戦士の館』を襲撃する一ヶ月前の事である。

19・Negotiation Part 2 (後書き)

今回も分かりにくい文章でごめんなさい。

恐らく次回もかなり時間がかかると思います。

20・トラ・トラ・トラ

「コッ、コルスカツツエ！これがどう言う事だッ？」

一人の男が壁際に追い詰められながら大声を上げる。

彼を追い詰めるように囲む黒服の男たち。

そしてその黒服達の中心に眼光鋭い一人の老人が立っている。

パオット・コルスカツツエだ。

ここはカザルカより北西に位置する『侠客と奴隷の街』ザール。

その市内から東端に位置する奴隷商会組合の本部敷地内。

古代ローマの円形劇場^{トリア}を髣髴とさせる奴隷オークション会場、通称『嘆きの広場』を見下ろすように聳え立つ奴隷商会組合本部。

最も、北方自由都市群創立後の混乱に乗り、グラスコ・ガラ・バ・メデイチ率いるメデイチ奴隷商会があらゆる手段を使い他の奴隷商会を吸収したため、市井の人々からは『メデイチ奴隷商会本部』と揶揄されていた。

その建物の最上階にある、組合長執務室にコルスカツツエは居た。

「貴様、この様なマネをして！！他の首長達が黙っていないぞ！！
！わかっているのか！？」

この北方自由都市群は言うなれば五つの組織が中核となって作られた異様な都市の集合体である。

傭兵ギルド、娼婦ギルド、コルスカツエ・ファミリー、奴隷商会組合、ムセイオン大学の五つの事だ。

そして各組織のトップによる合議で都市群の政治は行われており、その最高意思決定機関は『五首長会』と呼ばれている。

その面子は傭兵ギルド長のシンダール・オドアケル、娼婦ギルド総括のサーシャ・ハドリアヌス、ムセイオン大学総長のベネヴィデア・ソクラテス、そして今ここにいるコルスカツエ・ファミリーの首領であるパーオット・コルスカツエ、そして壁際に追い詰められている奴隷商会組合長のグラスコ・ガラ・バ・メデイチであった。

「いいさ、もう『五首長会』が開催される事も無い。それにこれが終われば『首長』の役割も終わる」

「き、貴様、一体何を？」

狼狽するグラスコ。

コルスカツエは一枚の紙をグラスコに突きつけた。

サーシャがアラリックに突きつけた物と同じ内容の、いわば令状である。

最も、名前はグラスコ宛になっている。

「こ、この紙切れが一体どうしたと」

「金勘定に勤しみ過ぎて憲章の内容を忘れたんか？お前さんは？」

グラスコの言葉をコルスカツツエが遮った。

「憲章の中では、万が一、首長が背任行為を行った際には『五首長会』がその首長権限を剥奪する事ができると書かれておる。そして、剥奪された首長を除いて『五首長会』は開催される」

その言葉にグラスコの表情が変わった。

「今頃、サーシャの嬢ちゃんがシンダールのところへ向かっている頃じゃろう」

そして見る見るうちに青ざめていく。

「さて、首長が五人いてそのうち二人が背任によって権利を剥奪された。残った首長は何人かのう？」

令状にサーシャとコルスカツツエの名前が書かれている。

三人の首長中二人の名前が書かれている。

過半数を超えている。

グラスコはすぐにその場から逃げ出そうとしたが、囲まれていたためすぐに拘束されてしまう。

「離セツ！貴様ら、私にこんな事をしてどうなるか分かっているのかツツツ　　！！？」

喚き散らすグラスコの前にコルスカツツエは立った。

その顔に最早表情は無い。

「頼む、頼むから助けて

」

それがグラスコの最期の言葉だった。

一閃。

そしてグラスコの首に一本の朱の線が引かれる。

そしてそこから夥しい量の鮮血が吹き抱いた。

無論、コルスカツツエや彼の配下の黒服たちもそれを浴びてしまっ
が、表情を全く変えず微動だにしない。

辺りを静寂が支配した。

.....

「っと、まあシングルが北方自由都市群わたしたちを売り、帝国に裏で通じ
ていたのは理解していただけでしたね、ミスタ・アラリック？」

ロッケンは丁寧だか相手を馬鹿にしているのかどちらとも取れる口
調で喋っている。

それに対しアラリックは怒りに震えていた。

自分たちが北方自由都市群の住民の総意と言わんばかりの態度。

そして自分が兄と慕うシンダールへの生死を問わずの追放処分。

これらへの怒りだ。

そもそもこいつらは何様なのかとアラリックは思っていた。

今まで北方自由都市群の事を考えずにただ単に惰眠をむさぼってきただけでは無いか？

シンダールは自分たちのことを考えグラスコ・ガラ・バ・メデイチと結び、自らこの北方自由都市群を帝国に献上する手はずを整えた。それによってシンダールには爵位が与えられ、彼や彼が率いる『矛盾の旅団』も帝国軍兵士としての地位が約束されていた。

それなのにこいつらは……………

自分たちが如何に北方自由都市群の為に力を尽くしたか。

それなのに……………

アラリックは心中で毒付く。

「まあ、シンダールだけじゃあ無く貴方にも一つの罪状があるんですがね、アラリック」

アラリックの思考が止まる。

「何の事だ、シシリー？」

「身に覚えがあるだろうか？」

口を開いたのはロツケンではなくテオドリックであった。

「貴様には聞いていないぞ、テオドリック！この裏切り者が！！」

「裏切ったのは貴様らだろうか？シンダール殿……いや、シンダールに与し、地位と引き換えにグラスコ以外の首長を帝国に引き渡そうとした奸物には言われたくは無い。それに……」

テオドリックの視線が急に鋭くなる。

「ロガー坊ちゃんに刃を向け、シンダールの子殺しの片棒を担いだ事だよ」

「何だ、そのような事が」

「……そのような事だと？」

「そうだ、ロガーはシンダール兄貴の跡継ぎでありながら変心し、墮落した！その様な者が父の跡を継いで傭兵ギルドの長を襲名するなど有り得はしない。だから彼奴が更なる狼藉を犯す前に肅正したまでだ」

アラリックは自分が正しいような物言いだ。

「ほとほと見下げ果てたよ、アラリック。折り合いの悪い俺だけならまだしも、坊ちゃんを殺すのに何の躊躇いを持たないとはな」

「何い？」

「坊ちゃんは貴様の事をかなり評価していたのだぞ？父親であるシンドールへの忠誠心、そしてその蛮勇も、言い換えれば勇敢だからな。だからこそ貴様の部隊を『矛の旅団』として他の部隊より上位に置いたというのに……」

「ふん、そんなのは唯の牽制の為にやったに過ぎん！貴様だけを優遇すると俺が不満を抱くとも踏んだのだろう！！何と言っても“世渡り上手”な貴様が後見なのだからなッ！！！」

テオドリックはもう開いた口が塞がらなかった。

「はぁ……これも忠誠の成せるものか？……いやここまで来ると盲信というところでしょう」

「同情するさね、テオドリック」

サーシャがそれとなくフォローを入れる。

そして今度はサーシャがアラリックに語りかける。

「アラリック、アンタに聞きたい事がある」

「何だ、この売女？」

最早、サーシャもアラリックの悪態に突っ込む気すら起きない。

「アンタ達、今回の事が成ったらテオドリックも家族諸共、帝国に引き渡すって言うのは本当かい？」

一瞬の間が開く。

そして………

「ふん、当たり前ではないか。テオドリックは帝国では逆徒のなのだから！その家族も大罪人で相違あるまい！？」

彼の問いかけにアラリックは悪びれもせずに応えた。

「冗談じゃ無いよ！？テオドリックの息子には、アタシの娘が嫁いでいるし、孫もいるんだ！！あんた達は私も最初から敵に回す積もりだったのかい？」

サーシャは怒りを露にした。

「アンタ達……ここまで人でなしだったとはね！？あきれてるものも言えんよ」

「構わんさ！どうせ貴様らはもうすぐ物言えぬようになるんだからな！！」

「何です？」

シシリーが気だるそうに聞く。

「俺が僅かな手勢だけで来るとでも思ったか？もうすぐ兄貴の息のかかった兵団が幾つものここにやってくる。そしたら貴様らも血祭り」

「ああ、それは有り得ませんよ」

シシリーはアラリックの話を切るように言った。

「貴方が出した伝令はこつちでしっかり処理させて頂きました。それに……」

シシリーは身の毛もよだつ様な笑みを浮かべる。

「仮にたどり着けたとしても、そこには誰もいませんよ」

アラリックの表情が変わる。

「きつ、貴様！何をした!？」

「何、簡単な事ですよ。差し入れたと酒を持って行ったら何の疑いも無く飲むものでね。いやー、しかしここまで単純だとかえって拍子抜けですよ。一人ぐらいは毒が入ってるんじゃないかと疑うと思っただけですが……」

アラリックは言葉を失う。

言葉から察するに、相手側は前もってシンダールに付きそつな兵団をテオドリックの助言から洗い出し、そこに差し入れと称して毒入りの酒を持って行ったのだらう。

誰も気付かなかった？

いや、僅かではあるが気付いた者もいた筈だ。

もっとも、その気付いた者達も結局は近くに潜んだ敵に皆殺しに・・・

アラリックの血液が沸騰した。

「貴様らッ！！総員抜つと」

アラリックの言葉は最期まで出なかった。

訂正、出たとしても最後の方は誰の耳にも届かなかっただろう。

辺りに轟く銃声。

ガリルの放った5・56mm弾やPKMの7・62mm弾がアラリックを初めとする『矛の旅団』の面々の鎧を貫き、肉を引き裂き、骨を砕いた。

掃射が終わり、銃声が鳴り止んだとき、アラリック達がいた所には唯の肉塊しか無かったという。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

戦士の館、五階。

ここで今回最後の攻防が繰り広げられていた。

いや、攻防というには一方的過ぎた。

「ずおおおおおおあああ

！！！！！！」

まず、リアレスの突進が階段近くに気付かれたバリケードを破壊した。

それと同時に彼女の突撃槍ランスの内部に組み込まれたPKMが火を噴き、辺りの敵兵を根こそぎ薙ぎ払う。

「畜生オオオ　　！！！」

リアレスの掃射から逃れた一人が果敢にも彼女に斬りかかろうとするが、

「グペエツ」

ガードルードが左手に持つAA-12から放たれたバラ弾バックショットが斬りかかった男の頭を吹き飛ばす。

そして近くに迫った他の敵を右手に持つ、愛用の斧槍ハルバートで鉄製の鎧こと真っ二つにした。

「かぁー、凄いな、あいつ等。俺にはあんなマネ出来やしな
いよ。なあ、お前もそう思うだろう？」

厳正は少し離れた所よりSG550で援護射撃しながら、隣にいるバラクラバを被った男に話しかけた。

その男もガリルを使つての援護射撃に徹してしており、前方に『無双』（リアレスとガードルード）と後方に『凡人』（厳正とバラクラバの男）に図らずも分かれる結果となった。

そんな彼らは瞬く間に敵の殲滅を終えると、奥にある大きな両開きの扉を目指し歩き出す。

そして、リアレスの突撃槍ランスとガードルードの斧槍ハルバートが扉を吹き飛ばすと、その部屋の奥には執務席に腰掛けた一人の老人がいた。

それを確認するなり蔵正は無線機に叫ぶ。

「こちらアルファー。標的を視認。状況はトラ・トラ・トラ。ワレ、奇襲二成功セリ。繰り返す。状況はトラ・トラ・トラ。ワレ、奇襲二成功セリ」

20・トラ・トラ・トラ（後書き）

恐らく次回の投稿まで、かなり間が空くと思います。
ああ、花粉がひどくて辛い（涙）

21・シンダール・オドアケル（前書き）

お久しぶりです。

何とか生きてます。

かなりやっつけの部分も多く、お見苦しいかもしれませんが、どうぞ。

21・シンダール・オドアケル

シンダール・オドアケルの出生については諸説ある。

ある者が言うには、とある盗賊が拐った娘達に産ませた多くの子の一人で、母が死に、父が帝国に捕られた後に死体漁りから身を立て傭兵になった。

また別の者が言うには元々は農家の倅で、地方貴族の反乱で父母が死に、さ迷っている所を少年性愛者シヨタコンの女傭兵に拾われ、幼い身ながらも夜伽の相手をさせられ、彼女の死後に彼女の人脈を引き継ぎ、後に傭兵団を築く礎にした。

そして更には異世界からやって来たと言う者までおり、シンダール自身が語らない事もあり未だにハッキリしていない。

だが、彼が十代も半ばに差し掛かる頃には、既に戦場に身を置いていた事は周囲の証言からはっきりしている。

その時には既に一人前の傭兵としての技量と風格も既に有ったらしく、彼が並みではない幼少期を送ってきた事を想像出来るだろう。

この傭兵としてのスタートが早かった事が、彼が傭兵ギルドの長になる事が出来た要因の一つだろう。

しかし、それが最大の理由ではない。

彼が傭兵達のトップに成り得た理由。

それは彼が持つ奸智と床の巧さであろう。

彼は自身の傭兵団を立ち上げる際に、とある妙齡の貴族の未亡人と愛人関係を結ぶ代わりに資金の提供を取り付けた。

豊富な資金をバックに整った装備と人を揃えたシンダールは、傭兵団旗揚げから僅か五年の二十そこそこの時には傭兵ギルドへの加入を許されている。

また、この五年の間にもパトロンとなった未亡人とその娘との間に子供を作っており、後にその内の一人が爵位を継いでいる。

だが、古くからの傭兵団が犇めくギルドでは所詮は新参者。

権力など無いに等しくこれから二十年は小間使いをしなければならぬのが通例である。

しかし、シンダールはこれに当てはまらなかった。

ここで彼が成り上がったもう一つの要因、奸智が登場する。

彼は巧みにギルド内の有力者が対立する様に仕組む為に、疑心暗鬼になるような噂を流した。

それと並行して各傭兵団の中堅や若手と接触し、徐々にではあるが確実に自身のシンパを増やしていく。

シンダールはこの作業に十年を費やした。

あとは簡単であった。

お互い疑心暗鬼になった傭兵ギルドはシンダールが流した些細な噂で内乱状態に突入した。

だがその内乱は呆気ないぐらいに終わりを迎える。

各傭兵団の中堅や若手がシンダールと合流。

これにより最大勢力となったシンダール達は他勢力を瞬く間に殲滅し、帝国が介入する前事を収めたのだ。

これにより傭兵ギルドの主だった実力者は皆戦死し、三十と異例の若さながらもこの事件を收拾したシンダールが傭兵ギルド長に就任。

全てはシンダールの思惑通りであった。

そしてそこからは順風満帆・・・とはいかないが、かなり順調といつてもいいだろう。

帝国軍幹部の息女を妻に迎えることにより軍部とのパイプを作り、聖教による卑職追放運動によって北方自由都市群が設立される事になった際も上手く立ち回り首長の地位を手に入れている。

その妻との間には跡取りのロガーを儲けた。

更には多くの諸領の軍に人材を派遣し貴族達との繋がりも強固なものにしていった。

『卑職』と蔑まれる傭兵に身を置きながらも飛ぶ取り落とす勢いでシンダールの名声は上がっていく。

だから、だからこそ今回の事も上手くいくと踏んだのだろう。

圧倒的な兵力差と自分の勢力下というアドバンテージ。

それを過信したのが敗因といえるだろう。

そう、執務机に腰を掛け、部屋に突入してきた巖正達を睨み付ける
壮年の男。

シンダール・オドアケル。

生涯最大にして最後の敗北を喫した男がそこに居た。

.....

「さて、ミスタ・シンダール。我々がここに来た理由は既にお分かり
りですね？」

口火を切ったのは巖正だった。

「貴方には北方自由都市群からの追放令が五首長会より出ておりま
す。生死を問わずで。速やかにここから立ち去るのならば命の保障
は致しましょう。しかし、従わない場合は」

「いい加減前口上は止したらどうだ、若造」

シンダールが巖正を睨み付ける。

「貴様たちがここに来たという事はワシを生かして北方自由都市群から出す気が無いという事だろう?」

「……………話が早くて助かるよ、シンダール・オドアケル」
そう言うと厳正はSG550をシンダールに向け構えた。

それに倣い、リアレスはPKMが内蔵された突撃銃ランスを、ガードルードもAA-12をシンダールに向ける。

そして少しの間を持って、最後の一人がガリルの照準をシンダールに合わせた。

「まあ、アンタに生きていられると後々困るんだよ、シンダール。アンタは一代で傭兵ギルドを乗っ取った傑物。それ故に狂信的な配下や支持者も多い。貴方を生きて逃せばゆくゆくは私たちに大きなしっぺ返しが来そうぞ、怖くて枕を高くして眠れそうに無いのでね」

「ふん、それでワシが抵抗したので止む負えず殺した、という事になるのか?」

……………成る程、流石は奸智で知られ男。

こちら側が用意したシナリオまで見通しているとは。

厳正は心中で唸った。

「ふつ、これではアレが言った事は正解だった様だな。全く、女と
いうものはこういう時に感がよく働く」

「……？……！！……HQ！至急各班にカザル力を封鎖するようじ」

「もう遅い。アレ達は既に北方自由都市群を出て今頃は帝国領内に入ったころだろう」

抜かった。

巖正は苦虫を噛み潰したような表情をする。

シンダールの言うアレ。

そうシンダールの後妻とそれが産んだ息子の事だ。

今回の作戦でこの二人の確保も目的の一つとして含まれていた。

もしシンダールを討ち取ったとしても、この二人が北方自由都市群外の親シンダール勢力と接触し仇討ちの旗印にされて困るし、こちら側にも動揺が広がるからだ。

「……いつ頃二人を逃がした？」

「二月前だ。積荷に紛れさせて家族のところへ送った」

「……かつてパトロンであった未亡人母娘の所だろう。」

帝国領内ともなると迂闊には手が出せない。

「……まあ、その未亡人母娘も立って歩けない乳飲み子を旗印にするほど無謀とも思えないが。」

出た幸運が自身を追い詰める者に一矢報いた事が痛快で。

もう一方は圧倒的に優勢であったが最後の最後で窮鼠に噛まれてしまった自身の事が情けなくて。

ただ一度の判断の違いが、全く違う未来を紡ぐ世の理が。

自分と相手の判断が招くこれからの結果が。

全てが可笑しく感じた。

傍から見れば気が触れた様に見える二人。

しかし、この部屋にいる二人以外からはその様には見えない。

そう、その程度には見えない。

気が触れたところの話ではない。

そう、狂っているのだ。

狂笑。

まさにそのものである。

その狂笑はどのくらい続いただろうか？

ふと唐突にそれは止み、お互いの顔にはその残滓がまるで仮面の如く張り付いている。

「まあ、お互いに完勝とも完敗ともならなかったわけだがシンダール。俺達の勝ちはもう九分九厘動かないわけだ」

「ふん、悪趣味だな小僧。勝者が敗者を蹴るのは一番みっともないぞ？」

「いやいや、生憎俺にはそんな趣味はないよ。それにアンタみたいなオッサン蹴つても、飯が不味くなるだけだし」

「じゃあ何だ？用がないならさっさと済ませろ」

「いやあ、聞きたい事があってさ。あんたに」

そう言うと厳正の表情が能面の如く無表情なものに変わる。

「ロガーについて」

それを聞くなりシンダールの表情も厳しいものになる。

「そもそも俺達の対立の起点は元を正せばロガーがこのガードルドの娘に狼藉を働こうとしたのが始まりだ。そして俺達はそのロガーと一件起こしている。そのロガーが何者かに殺され、その容疑がガードルドをはじめとする俺達に掛かった。そして、俺達に対する襲撃があつて、結果俺達はカザルカ（この街）から姿を消す事になった」

お分かり、と言いたげに表情を変える厳正。

そして話を続ける。

「だけど見事なぐらいに不自然なんだよ、この流れが」

「不自然、と？」

「ああ、円滑すぎるんだよ。一連の出来事の流れが。まるで一つの意思によって企てられているかの様に」

「……………」

「ああ、話さなくて良いよ、シンダール。一々聞くのも面倒だ、こっちから話す」

一呼吸置く厳正。

そして、

「俺達を陥れるために、あんた、ロガーを殺したろ？」

最期の弾丸が如く、言葉を発する。

「……………その事か？」

しかしシンダールの返答に動揺は無かった。

「その回答、肯定と受け取るぜ。で？実の息子を殺さなければならぬ理由を教えてくださいよ？出来る限り詳しく、簡潔に」

その言葉にシンダールは目を瞑り、言葉を発し出す。

「あ奴が一年前辺りから変節したのは知っているだろう？」

「ああ、調べたからな」

「あ奴は、何故か急に乱暴狼藉を働きだしてな？ほとほと困った」

「それで」

「一年は様子を見たが、改心は見られなかった。そこに……」

「俺達がきた」

「そつだ、貴様たちがロガーを殺した事にすれば、貴様たちという不安要素をこの街カザルカから排除出来るだけではなく、傭兵ギルドの跡継ぎ争いという懸念も払拭できる」

「成る程、持て余していたものを有効活用したわけだ？」

「言いかたは悪いがそうなるな」

内部に嘗てからあつた懸念を処理し、それを外部から来た敵対しそうな者たちのせいにし、弾圧する。

古典的な謀略の一つだが有効な手段だ。

蔵正はそれを聞くなり「成る程、成る程」と頷く。

そして再びシンダールに問いかけた。

「じゃあ更に聞くけどロガーに対して罪の意識とかは無いわけ？あんたは？」

「……あるわけ無かるう。北方自由都市群わしらの未来のためになると思ってやった事だ。あの様な親不孝もの命一つでそれが護れるのならば安かるう？」

「その言葉を聞く限り、全く罪の意識はないと？」

「ああ、身内の汚点は身内で雪がねばならぬからな」

その言葉を聞くなり、厳正の口が三日月を描いた。

そして仲間達の一人に目を向ける。

「こんな事言ってるけど、お前はどっ思っただ？」

そう言う一人が動き出す。

その人物の表情は窺い知る事は不可能だ。

何故ならガードルードでもリアレスでもない、バラクラバを被った四人目だからだ。

では何故、厳正はこの男を、シンダールを確保する部隊に加えたのか？

戦力的に考えればガードルードとリアレスで十分であるはずだ。

そして四人目がバラクラバに手をかけ、素顔が明らかになる。

「おっ、お前……！！！」

その顔を見たシンダールの顔が驚愕に染まる。

何故ならば部屋の風景と化していた男が、自分が殺すように指示し、始末した息子、ロガー・オドアケルだったからだ。

21・シンダール・オドアケル（後書き）

恐らく次話までもかなり空くと思います。

ああ、早く人生どげんかせんと・・・・・・・・orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878p/>

異世界生活はじめました

2011年6月19日08時54分発行